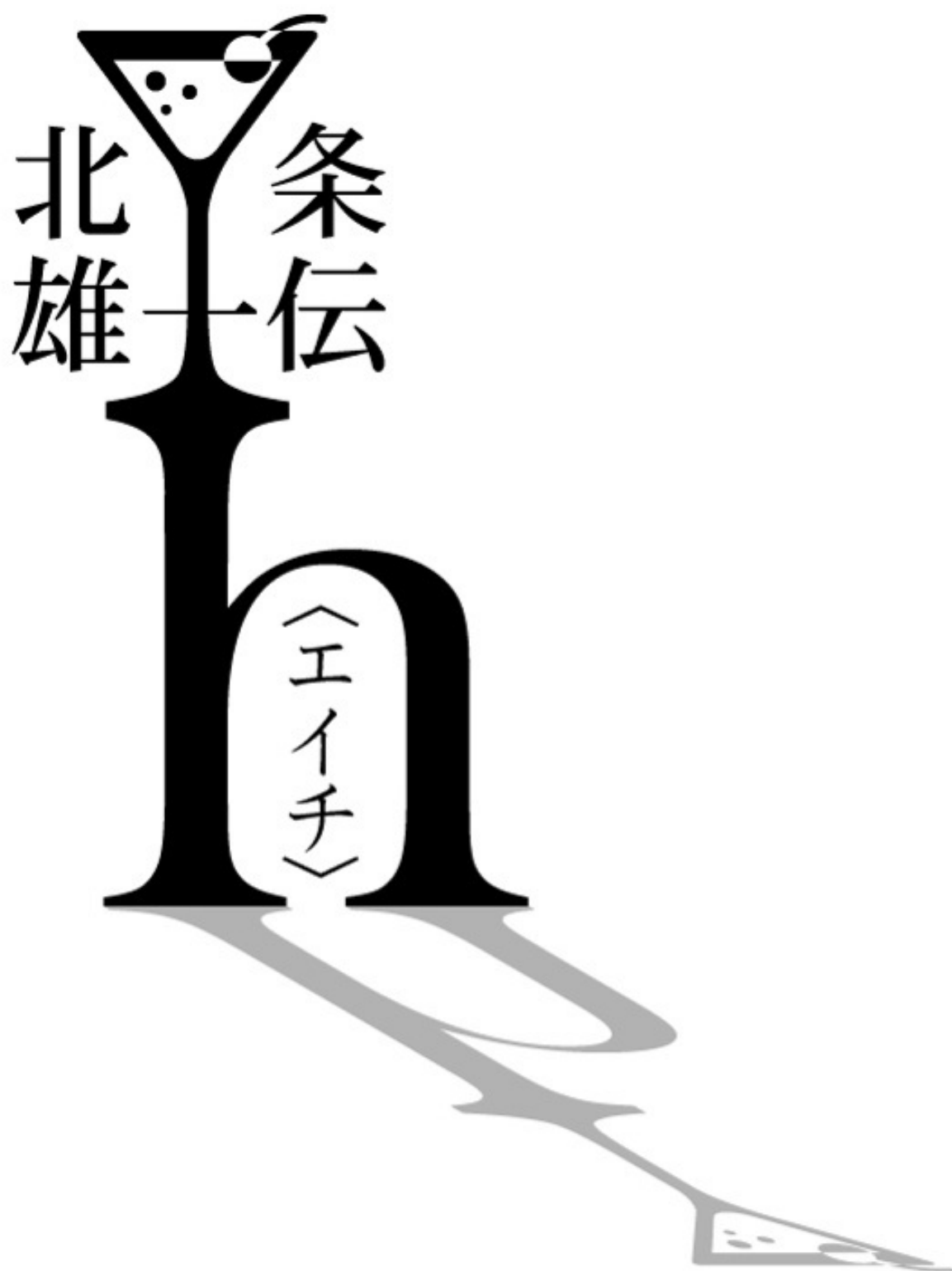


北条雄一



"自分を名乗れないようなセコイ生き方してたら、
この歌舞伎町ではのし上がっていけねーぞ"

「チキン」「アウト」の井口達也 大絶賛！ホスト協会の会長、
北条雄一の生き様を描く、新感覚サクセスストーリー。
新たな夜のカリスマがまた一人誕生する。

決意

勤めていた会社が倒産した。

俺、北條雄一が23歳の時だった。

色々なことがあり、地元に住れなくなっていた俺は、
地元である埼玉から宮城の仙台に越してきて、そこで働いていた。

職業は、”運転手”。

偶然にも、俺の親父と同じ職業だった。

親父の話はまたいずれ書こうと思うが、
俺はこの偶然にどこか得体のしれない、ある種の嫌悪感の様なものも感じていた。

運転が無い時は、輸入品の家具などを売る営業の仕事をしていた。

俺は、”自分を売る”と言う信念のもとで必死に営業を続け、
持ち前の根性を活かして成績を伸ばし、会社の中では一目置かれていた。

会社の会長に気に入られていたってのもあるが、
俺の顧客が数千万円の家具を買ったり、会社の売上には随分貢献もしていたと思う。

しかし、その会社があっけなく倒産。

「津田会長...これから、どうなるんですか？」

津田会長は、長身でやせ形の人だった。

しかし時折見せる鋭い眼光に、俺はこの人の底の深さを感じていた。

俺の心情を察してか、不安な表情を浮かべる俺に、津田会長はなだめるように言う。

「いや、お前は心配しなくても大丈夫。俺が面倒を見てやるから」

会長は俺の家の事情を知っていた。

当時、俺の家には後輩たちが10人ほど住んでいた。

俺と同じように、地元に住れなくなった奴らだ。

1人を受け入れると、次から次にやってきやがって、その人数になっていた。

でも俺は、俺を慕うそいつらが大好きだった。

家族のように思っていた。

そいつらはそれぞれ日雇いの仕事などをしてはいたが、

そいつらを食わせて行かなきゃならないと、俺はどこかで責任感を感じていた。

心配しなくても良いと言う会長の言葉に、最初の頃は甘えていた。

(会長、有難うございます。助かります)

しかし、ある日人づてで、
会長が事業に失敗して何百億の損失を出してしまっていた事を知ってしまった。

自分の生活にも困る状況なのに、俺の面倒を見てくれたのだ。

直ぐにでも会長の元に行き、謝りたかった。

しかし、会長は俺にその事を知ってほしく無かったんだろう。
だから俺も、知らない事を通したまま、別に仕事を見つけなければならないと思った。

そんな矢先、今考えると天啓のような、運命の電話が鳴る事になる。

電話の先にいるのは、俺が埼玉でお世話になっていた、
アウトロー時代の先輩、カツヤ君だ。

「おう雄一、最近大変らしいな」

カツヤ君は、厳しい人だったが、俺の事は良く気にかけてくれていた。

この時も、どこかから会社倒産の話を聞いて、俺に電話をくれたのだろう。

「そうっすね...こんな状況で、新しく何か仕事しなきゃって感じです」

「そうか……」

俺が現状を一通り話すと、カツヤ君がいきなり切りだした。

「雄一、お前歌舞伎町でホストやってみねえか？」

カツヤ君が、歌舞伎町でホストクラブを経営していたのは知っていた。

しかし、当時俺にはホストと言う職業に対し、どこか蔑んだ見方をしていた。

「ホスト...ですか？」

「俺の店、今人を探してんだ。
結構繁盛してて、忙しいんだよ。
お前なら適職だと思うんだが、どうだ？」

「いや、カツヤ君、話は有難いけど俺にはホストはちよっと...」

「お前、半端なくモテてたろ。
そんだけ女の扱いが出来る奴が、ホストに偏見持ってるとは言わせねーぞ」

確かに、女にはガキの頃からモテていた。

昔は不良＝モテると言う時代。

小学校4年にして、バレンタインのチョコを40個くらい貰っていた。

その後もずっとそんな感じで過ごしていて、
実はこの当時も仙台に5人の彼女が居た。

「ホストって、軟派でチャラチャラしてるとってないか？
そりゃそんな奴もいるけど、まともな奴も多いんだぜ。
お前の暴走族時代の知り合いも多いし、
みんな頂上を獲るためにギラギラして必死でのし上がろうとしている。
喧嘩だってしょっちゅうだ。」

そして、こう言った。

「お前、ホストを馬鹿に出来るほど立派な生活してるのか？」

俺は言葉に詰まった。

確かに仕事はしていたが、俺は昔と変わらず、女、酒、暴力の日々を送っていた。

しかも、今はその仕事すらない。

...そう考えた時、俺はホストと言う職業をを否定できなかった。

「...ホストってのはなあ、男を買ってもらう職業なんだよ」

その瞬間、俺の中で何かが繋がった気がした。

ホストは、男を買ってもらう。

女性にお金を払ってもらうけど、それは人の価値を買ってもらうようなもんだ。

魅力のない人間には金を払う価値が無い。
それが、ホストというシビアな世界だ。

俺は産まれてからずっと今まで、
男を売るために生きてきた。

自分を認めてもらうため、自分を買ってもらう為、
自分と言う男を周りに誇示してきた。

そうか、ホストも変わらないんだ。

そう考えた時、俺の考えは決まった。

「...やります」

俺はホストの世界を、面白そうだと感じていた。

こうしてホストの世界に足を踏み入れる事になる。

修羅場

さて、そうなる問題は、仙台の仲間や彼女達の事だ。

10人ほど面倒を見ていた俺の後輩たちは、俺の考えを話すと大賛成してくれた。

「雄一さん、まさに適職じゃないっすか！」

「俺らの事は心配しないでください。
今まで世話になりっぱなしだったし、これ以上甘えてられません」

こいつらと別れるのは正直寂しかったが、
元は同郷の奴等だ。帰ってくればいつでも会えるだろうと考えていた。

後輩たちは良いとして、問題は5人の彼女たちだ。

(別れ話を言わなきゃなあ...)

マイ
美優
サチコ

...あと二人は誰だっけ？

とにかく、彼女たちに別れを言わなけりゃいけなかった。

それぞれに、歌舞伎町に行くことを告げる。

彼女たちの反応は様々だった。

あ、そう。と一言いい、冷ややかな視線を送る女。

泣きじゃくってしまってグダグダの別れになってしまった女。

その中でも印象的だったのが、マイだった。

「ユウくんなら絶対成功するよ！応援してる！」

俺の目を見て、真っ直ぐな瞳で言ってくれた。

「いつかユウくんの店に行くから、その時は宜しくね！」

マイは、健気で優しい子だった。

切っ掛けは、ある居酒屋チェーン店で俺が飲んでいて、
ある事件があって店員であるマイが声をかけてきて、それから付き合いが始まった。

居酒屋で接客をするマイにとって、
水商売はそんなに他人事のように思えなかったのかもしれない。

1人で歌舞伎町に行くという俺の勝手な判断は、このマイによって少し救われた気がした。

しかし後日、マイにはもっと大きく救ってもらう事になる。

「さて...問題は美優だな」

美優とは、その時一緒に暮らしていた。

10人の後輩がいる、俺の家の中でだ。

美優は当時23～24歳ぐらいだったが、金融の会社を経営していた。

綺麗な顔つきをしていたが、プライドが高くちょっと性格がきつい所があった。

出しっぱなしにしていた通帳を一度見たことがあるが、預金額は3,000万円を超していて驚いた事を覚えている。

そんな彼女の口癖は、「不良は大嫌い」。

...なのだが、俺の家に住んでいる10人ほどの後輩は、みんな揃いも揃って不良だ。

そんな奴等を世話してる俺も当然不良。...と言うか俺が一番の不良だ。

後輩たちと華を咲かせる武勇伝を、美優は冷ややかな目で見ていたのを思い出す。

「美優...俺、歌舞伎町でホストになるから」

言った瞬間、美優の顔が途端に険しくなる。

「...何言ってるの？私はどうなるの？」

俺ははっきりとした答えを告げれずにいた。

美優を連れて行くという選択肢もあったからだ。

しかし、美優は会社も経営している。

そう簡単には行かなかった。

それから数日間、何とももやもやした状態の中、美優との生活は続いた。

そんなある日、事件は起きた。

いつものように、夕食後、後輩たちとテレビを見ながら談笑していた。

そして笑いながらテレビを見ていると、背後から何かを叩きつけるような湿っぽい音が聞こえた。

ベチャ！！

後ろを振り返ると、濡れた後輩の靴下が床に叩きつけられていた。

そしてその後ろには、鬼のような形相の美優がこちらを睨んでいた。

「なんであたしが、こんな不良たちの靴下を洗わなきゃいけないのよ！！」

美優の中で何かが切れたらしい。

次々に洗いかけの洗濯物、主に靴下を俺や後輩に向かって投げてきた。

美優は、ずっと我慢していたのだろう。

俺の彼女だったが故に、大嫌いな不良である後輩の世話も黙ってやっていた。

洗濯だって、当時1日に3回は回していた。

土方をやっていた後輩たちの靴下は、そりゃあ滅茶苦茶に汚かった。

女社長が、大嫌いな不良の靴下を洗濯する毎日。

そしてそこにきて、俺のホストになる宣言。

切れてもしようがないのかも知れない。

しかし、この時は俺の方も切れてしまった。

「てめえ！こんな不良達ってなんだよ！！
俺だって不良だよ！！」

家族のように思っていた後輩たちを馬鹿にされて、
俺の中で何かが抑えられなかった。

大声に一瞬ビクツとした美優だったが、
直ぐにまた洗濯物を投げつけながら罵声を浴びせてくる。

後輩たちが止めに入ったが、
こうなった俺は誰も止められない。

俺は後輩の静止を振り切って美優の腕をつかみ、家の外に出して鍵を閉めてしまった。

ドンドンと壁を叩きながら、喚く美優。
俺は相当怒っていたので、すぐに入れたらまた面倒な事になると思いしばらく放置していた。

それから20～30分は経っただろうか、気がついたら外が静かになっていた。

少しは落ち着いたか...？

ちょっと悪い事したなと思い、中に入れようと玄関のドアを開けると、美優が居ない。

もしや、そのまま友人の家にでも行ったか？

そう思ったが、違った。
美優は台所の鍵のかかかっていないドアからこっそり家に侵入していたのだ。

そしてドアを閉めて居間に戻ろうとする俺の視界に、美優が写った。

そこには、果物ナイフをこちらに向けて構えている美優が居た。

帰還

急激に全身から血の気が引いていくのを感じた。

後輩たちはまだ居間で、美優の存在に気づいていない。

俺が美優の存在に気づいて足を止めていた時間は1秒も無かったろう。
俺は反射的に美優に向かって飛び掛かっていた。

しかし、美優との距離は3メートルはあっただろうか。
美優が俺の接近に気づいて、ナイフを持つ右手を振りかざすには十分だった。

ブンッ！

美優は、もしかしたら振りかざすつもりなどなかったのかも知れない。

しかし、いきなりの俺の接近に美優も驚いたのだろう。

ともかく、余計な硬直をする前に俺は動いてしまった。
いままでの喧嘩の経験から、それが最善だと判断したからだ。

「美優！！！」

素早く、振りかざした美優の右手首を掴む。

美優は、暴れなかった。
元から、本気ではなかったのだろう。

手首を掴まれ、押し黙って、それでもじっと俺の目を見つめる美優の瞳に、俺は恐怖を感じた。

「雄一さん！」

「大丈夫ですか！！」

後ろから後輩たちの騒ぐ声が聞こえた。

この騒ぎに気付いて駆け付けたのだろう。

後輩たちによって、美優の手から果物ナイフが離される。

美優は、その場に座り込んで泣いていた。

...ここまで追い詰めてしまったか。

俺は、激しい自責の念に駆られた。

ひとしきり泣いた後、美優は自室へ戻って行った。

ふと、左手に痛みを感じて見ると、ナイフによる切り傷があった。

いつの間にかナイフで切っていたのだろう。

僅かに滲む血の痛み。

(これは...俺の覚悟の代償だ)

そう感じた。

その日は美優と同室で寝る事は出来ず、居間のソファで寝た。

次の日、仕事から戻ると美優が居なかった。

そして、それから美優は戻ってこなかった。

書置きも何も無い、寂しい別れだ。

(こんな、女の子を悲しませるようなやつが、ホストなんてできんのかよ...)

美優の件は俺の心に少なからずショックを与えたが、今更引き返すわけにはいかなかった。

「常務、俺、歌舞伎町に行こうと思います」

常務は、学生時代に俺の生まれた赤羽の学校に寮生として通っていて、俺を良く可愛がってくれていた。

この人もヤンチャな人だったので、俺としては話しやすく、兄ちゃんのような存在だった。

一通り事情を話すと、常務は少し寂しそうに言った。

「そうか。お前が決めたんならそれでいいが、何ならうちで働いてもいいんだぞ？」

常務は、倒産した会社とは別に土地関係の会社も持っていた。

「...有難うございます。でも、俺、決めたんで」

常務の好意は嬉しかったが、俺はいつまでも甘える訳にはいかなかった。
甘えてしまったら、俺はこれ以上大きくなれないような気がしていた。

会社、

後輩、

彼女、

それぞれに別れを告げた。

一後は、自分自身だ。

俺はガキの頃からそうで、逆境に立てば立つほど燃える事が出来る。

ぬるま湯につかっていたら、いつまで経ってものんびりしてしまうだろう。
のんびりしてたら、いつまで経っても現状維持のままなんだ。

俺は、荷物を全て仙台に置いていく事に決めた。

そしてサイフと飛行機のチケットだけ持って、ヨレヨレのスーツ1着を身にまとい、手ぶらで飛行機に乗り、仙台の地に別れを告げた。

一東京都新宿区 新宿駅

カツヤ君との待ち合わせは、歌舞伎町に程近い新宿駅だった。

ガキの頃、しょっちゅう来ていた新宿。
東口の改札をくぐると、東京独特の匂いが鼻を衝く。

「...歌舞伎町の匂いだ」

匂いが引き金となり、過去の記憶がフラッシュバックされる。

のし上がろうと必死だったガキの頃。

周りの激流に抗う事無く、何の迷いもなく、てっぺんを取ろうと躍起だったあの頃。

新宿の地を踏みしめ、待ち合わせ場所に向かうたびに、
俺の中で、ギラギラしたあの頃の自分に戻っていくような感じがしていた。

「雄一、ここだ！」

新宿歌舞伎町にあるビル”風林会館”。

その近くのスーパー「エニイ」がカツヤ君との待ち合わせ場所だった。

そこに向かう途中の道すがら、カツヤ君に呼び止められた。

カツヤ君は豹柄のコートを羽織り、ブーツを履き、
いかにも只者じゃないオーラを出していた。

...この人は昔からこうだ。

後輩に対して厳しく、破天荒な所がある。

昔は良くカツヤ君の無茶振りに付き合わされたもんだ。

(相変わらず派手な格好をしているなあ)

そんな事を思いながら、カツヤ君に挨拶をする。

「お久しぶりです！これからよろしくお願いします」

おう、と軽く返事をし、カツヤ君はしげしげと俺のいでたちを見る。

「雄一...お前、荷物は？」

「手ぶらで来ちゃいました」

「手ぶらって、着替えもないのか？」

「サイフだけっす」

一瞬間を置いたカツヤ君、
事態を飲み込むと、周囲を気にせず大笑いしだした。

「お前！相変わらずだな...！」

俺はそんなに変な事をしたつもりでは無かったが、
白い歯を見せるカツヤ君を見る限りなかなか普通ではなかったのだろう。

良い意味なのか悪い意味なのか分からないが、
相変わらずと言われたことが俺は妙に嬉しかったのを覚えている。

「裸一貫で、一旗揚げに来ましたから」

俺は少し、はにかみながらこう答えた。

その場で少し雑談し、早速カツヤ君がやっているホストクラブに連れて行ってもらう事に。

歌舞伎町は、有名な看板のある一番街通り、
一番広い中央通り、その横の桜通りがあり、その3つの通りが主要な通りだった。

これから連れて行ってもらう、ホストクラブ”花ごころ”は、その桜通りの更に横。
桜通りと区役所通りとの間に位置する、東通りにあった。

「雄一、ここだ。」

「え……ここですか？」

ルナールと言う喫茶店の地下2階に位置するその店を初めて見た感想は、
…想像していたよりずっと小規模な店だった。

そしてここから、俺のホストとしての人生がスタートした。

ハイヒールビール

カウンターを合わせて、7席ほどしかない店内。

まだ開店前の、薄暗い店内を見回して、
どこかで抱いていた華やかなホストクラブとの差異に、俺は少し混乱していた。

しかし、当時の歌舞伎町には10店舗ほどしかホストクラブが無い時代。
(ちなみに現在は歌舞伎町内に150~200店舗ほど存在する。)

”店が小さいから流行っていないんじゃないか”という俺の想像は、
その後見事に打ち碎かれることになる。

「雄一。俺と一緒に店をやってる、ワタルだ」

カツヤ君はそう言って、店内で開店の準備をしていた人を紹介した。

ワタルと呼ばれたその人は、俺より少し若く見えた。

「初めまして、よろしく。」

人懐っこい笑顔を見せるワタル君。

聞けば、やはり俺より2つ下だと言う。

ちなみにカツヤ君は俺の1つ上にあたる。

いかにも美少年と言う感じのワタル君。

当時ジャニーズ Jr に所属していたことから、その美男ぶりは窺い知れる。

ワタル君とカツヤ君は、共同出資で花ごころを経営していた。

実はこのワタル君、家族の不幸で一時花ごころを離れて実家に帰っていて、俺が店に入った日が調度ワタル君が復帰する日だったらしい。

カツヤ君はとにかく俺に対して厳しかったが、ワタル君は優しい所があり、まさに飴と鞭と言う感じだった。

「ホストは初めてらしいですね」

テーブルを拭きながらワタルさんが尋ねる。

「あ、はい。よろしくお願いします」

「この店はまだ開店して半年くらいなんですけどね。結構お客さんは入ってるんです。いきなりヘルプに入ってもらおうと思うんですけど、よろしくお願いします。」

(いきなりヘルプか...)

「わかりました」

俺は少し戸惑った様子を見せたが、内心は早く実戦に就ける事に喜んでいて。

なにがなんでものし上がってやろう。

そう思っていたからだ。

「今日は俺の客や、キョウヘイの客もいっぱい来ますから。なあキョウヘイ」

ワタル君に振られて、いかにも盛り上げ役と言った感じの青年がそう答える。

「そうっすね！よろしくお願いします！」

彼がキョウヘイちゃん。この当時は19歳だったと思う。

当時の花ごころのNo. 1ホストだった。

俺は当面の間、打倒・キョウヘイを目標にする事となる。

ちなみに彼もジャニーズJrに所属していた。

「よろしくお願いします。キョウヘイさん」

「キョウヘイでいいですよ、雄一さん。

実は...俺の先輩が、雄一さんの後輩だったんです！

そんな人からさん付けで呼んでもらうなんてできませんよ。」

どうやらキョウヘイちゃんは、俺の後輩の後輩だったらしく、ホストとしては後輩にあたる俺だが、色々と立ててくれていた。

ホストとしてはまだパーパーだった俺だが、

過去の事もあり、そこいらの”普通の新人”じゃなかった事は確かだ。

そう言った面では、随分と便利だったこともある。

しかしいきなりホストの先輩を呼び捨てにする事は出来ず、
”キョウハイちゃん”と呼ぶ事で落ち着いた。

店に入った頃には既に夕方。
そんなこんなをしている内に、開店の時間近づいてきた。

さすがホスト、みんなビシツとした格好をしている。

俺はと言ったら当然、仙台から着てきた一張羅。
着の身着のままのヨレヨレスーツのままだ。

(...まあ、初日で買いに行く時間もなかったし、これはしょうがない。
突っ込まれたら事情を説明しよう。)

そう考えていたのだが、甘かった。

俺は初日だから当然指名など無い。

となると、”誰も指名をしない客”、
若しくは”指名したホストが既に他の客についていた時”などに代役として入る事になる。

俺のホストデビューは、後者からだった。

始めて相手をした客の名は、蘭丸。

お客に向かってこの言い方は有り得ないかも知れないが、”この客はとんでも無かった”。

「失礼します！」

「...」

いきなり無視を決め込む蘭丸。

それもその筈...蘭丸のお目当てのホストが他の席についていて、嫉妬と苛立ちでとんでもなく不機嫌だったのだ。

「俺今日が初めてなんです、よろしく！」

「お名前は何て言うんですか？」

「ここには良く来るのかな？」

何とか会話に繋げようとするも、不発。

一番最初に喋った言葉は、

「せっかくだから何か喋ろうよ」

「...なんであんたなんかと喋らなきゃいけないのよ。」

これだった。

その後も、蘭丸は暴言を吐き続ける。

「よくあんたみたいなのがホストになれたわね？」

「なにその格好、舐めてんの！？」

蘭丸は既にボトルを数本開けていた。

新人の俺は、蘭丸の鬱憤を晴らす格好のカモだったろう。

今まで俺は、周りの女に所謂”チャホヤ”されて育ってきた。

悪い男がモテていた時代。

女に不自由するなんて一度も無かった。

ガキ大将だったガキの頃、総長だった暴走族時代、アウトローの時代は、いくら俺が邪険に扱おうと、勝手に女がついてきた。

俺だったら、女相手の商売なんて楽勝なんじゃないか？
そう調子づいていた所に、この現実。

目当てのホストに夢中な女には、
俺なんて眼中に入っていなかった。

今まで俺が思っていた女の本性は幻想だったのか...
そう感じ、凄く困惑した表情を浮かべていたのが彼女に伝わったのだろう。

「...あんた何つまんなさそうな顔してんの？」

俺が浮かぬ顔をしていたのが蘭丸にとっては気に入らなかったようだ。

「ふざけんなよ！客を楽しませるのがホストだろうが、何様だよ！」

そう言うと、蘭丸はおもむろに履いていたハイヒールを脱ぎ、それにビールを注ぎ始めた。

ドボドボドボ...

俺は目の前の光景に目を疑い、
これからされるであろう要求を想像し更に困惑の表情を浮かべていた。

「あんたグラス要らないでしょ？」

そう言って、並々とビールが注がれたハイヒールを、俺の前にグイと突き出す。

...これを飲めと、アゴを突き出す蘭丸。

季節は夏。

蒸れたハイヒールをビールの匂いが鼻を衝く。

...これが.....ホストの世界か。

俺は、恐る恐る口を付け、人生初のハイヒールビールを飲み干した。

素直にハイヒールビールを飲んだことに少し気を良くした蘭丸は、空になったハイヒールに次々ビールを注ぎ始める。

結局その日は、
蘭丸の席についてた間は最後までハイヒールでビールを飲まされた。

歌舞伎町の夜は長い。

洗礼の初日はまだまだ続く。

トモミさん

ホスト初日、延々と蘭丸にハイヒールでビールを飲まされる俺。

もう、味なんて分からない。

屈辱的な事をされている...それだけだった。

蘭丸は相変わらず不機嫌で、
本命のホストの様子を横目で気にしているようだった。

ふと周りを見ると、カツヤくんと目が合った。
カツヤ君はしょうがねえな、と言った顔で同情するようにこちらを見ていた。

良く見ると周りの客もこっちを見て気にしているようだった。
まあ、こんな光景なんてそうあるもんじゃないだろうからな。

恥ずかしさと悔しさとでぐちゃぐちゃになって、ろくに蘭丸と何を話したのか覚えていない。

その光景が2時間ほど続いたのだろうか。

「帰る。」

とうとうお目当てのホストに席についてもらえなかった蘭丸。

今日は諦めたのだろう。吐き捨てるようにそう言った。

ようやく解放される...

俺はホッとしていた。

しかし、蘭丸が口にしたセリフは、

「...靴が無い。」

履いて帰る靴は、ビールが何回も注がれてとても履けたものじゃなかった。
結局、俺は店を抜けて蘭丸の履く靴を買いに行く事になった。

蘭丸が店を出て、俺は次の指示を待つことになった。
しかし、狭い敷地なのに、客が入る入る。

常に満席で、7名程のホストがせわしなく動いていた。

「雄一、大変だったな」

先ほどの光景を見ていたカツヤ君が労う。

「ビックリですよ。あんな事よくあるんですか？」

「いやあ、滅多にないな。でも、あんな感じのクセのある客は多いぞ。」

カツヤ君は同情の色を浮かべながらも、
ホストの裏の世界を俺に見せられた事で少し得意げだった。

「それより雄一、今から俺の席のヘルプについてくれ。
その子の”枝”がお前に来るかもしれないからな。」

「はい、分かりました。...ちなみに枝ってなんですか？」

「ああ、ホストでは、中心となる客を”幹”と言って、
繋がりの子を”枝”って呼んでんだ。
今から来るのは俺の”幹”、
その客が”枝”を連れてくるから、
上手くその枝を引いてお前の幹にするんだな。」

「はあ、なるほど」

すると、席を移動する合間のキョウヘイが会話に入ってきた。

「カツヤさん、もしかして”トモミさん”っすか！？
...雄一さん、ご愁傷様です！」

「オイオイ...なんでトモミの席につくのがご愁傷様なんだよ。」

「いやあ、新人にあそこの席につかせるのはちょっと酷ですよ。
正直、俺だってやりにくいですもん。」

どうやらNo.1のキョウヘイですら臆しているトモミと言う女性の席に、
これから俺は着かなければならないらしい。

それからすぐにその”幹”が”枝”を連れて来店した。

「「いらっしやいませ」」

トモミと言われたその女性は、
遠目から見ても美人だとわかるほどはっきりした顔立ちをしていた。

濃いめの化粧にソバージュがかった髪、年は20後半くらいに見えた。

4人ほどのその集団が案内されて席に着き、
俺もカツヤ君に続いてその席に移動する。

「トモミちゃん、俺の後輩の雄一。
今日から入った新人だ。可愛がってやってくれ。」

「初めまして。雄一です。よろしくお願いします」

「カツヤの後輩なの？よろしくね」

後でわかった事だが、
このトモミさんと言う人の席はとても新人が付けるような場所ではなかったらしい。

トモミさんはとにかく厳しく、他のホストからも一目置かれているようだった。

先ほどキョウヘイが言ったセリフからもそれは伺える。

しかし、何故か俺はこのトモミさんに可愛がられる事になる。
勿論、本命のカツヤ君程じゃないが。

思うに、カツヤ君の後輩だという事が功を奏したのだろう。

他の新人だったら散々いじられていただろうヘルプを、俺は難なく乗り切る事が出来た。

「あなたも不良だったの？
不良はここでは人気が出るのよ。頑張ってね。」

”ここ”とはホスト業界と言う意味だろう。

当時黎明期だったホスト業界では、不良だと有利な所は確かにあった。

のし上がってやろうと言うハングリー精神が大きい奴が多かった事。

店同士や外部とのトラブルにも臆しなかった事。

同族とも言える、レディース上がりの子がキャバクラで働く事が多かった事。

何故キャバクラの子に知り合いが多い事が有利なのかは、追々わかるだろう。

「有難うございます。頑張ります」

俺は、このトモミさんに色々な事を教えてもらった。
酒の注ぎ方。水割りの作り方。タイミング。煙草の付け方。マナー。

今考えると、ホストが客に接客を教えてもらうなんてヒドい話だ。

しかし初日、右も左も分からない俺の先生は、このトモミさんだった。

「それにしても...随分な格好してるわね。」

トモミさんが俺の格好を見て眉をひそめる。

一張羅とはいえ、ヨレヨレのスーツで接客する姿は、
およそホストには似つかわしくないものだった。

これでお金を取るんだから、随分非常識なものだ。

さっきの蘭丸も、俺がキチンとした格好をしていればあるいは態度が違ったのかもしれない。

「ごめんねえトモミちゃん。
こいつ仙台から今日来たばかりで、かくかくしかじか、
サイフだけしか持ってきてないのよ。」

カツヤ君がフォローを入れてくれた。

余談だが、年に関係なく、基本的にホストは客を”～ちゃん”と呼ぶ事が多い。
無礼かも知れないが、ホストクラブでは通例となっている。

勿論、そう呼ばれることを嫌がる人には違う呼び方をするし、
ホストの方から自主的にちゃん付けじゃない呼び方をするケースもある。

俺は後者で、恐縮と尊敬と雰囲気から、トモミさんと呼んでいた。

話は戻り、俺が仙台から来たいきさつを聞いたトモミさん一向。

カツヤ君の話聞くやいなや、爆笑されてしまった。

「あはは、凄い事するね、それでこそカツヤの後輩！」

どうやら更に気に入ってもらえたらしい。

「そうだ雄一、明日トモミちゃんの買い物に付き合っただよってくれ。」

突然のカツヤ君からの提案。

どうやら明日はカツヤ君が用事で外せないらしく、代理で俺に行ってもらいたいとの事だ。

「あら、君が付き合ってくれるの？」

「あ、はい。分かりました。よろしくお願ひします」

会って二日目だと言うのに、俺がトモミさんの買い物に付き合う事になった。

その後も、トモミさんの指導を受けつつ、店は終了。
そして翌日、トモミさんと待ち合わせて買い物に付き合っただよ。

トモミさんの買い物なのに、向かった先はスーツ店。

「雄一君に新しいスーツ買ってあげる。
ホストがそんなだらしない格好していたら駄目よ」

そういつて、ポンと15万円ぐらひするスーツを買ってもらった。

はっきり言って会って二日目の新人ホストに使う金額じゃない。
しかし、カツヤ君の後輩だから良くしてくれたのだろう。

と言ってもこのトモミさん、元から資産家で金をたっぷり持っていた。

いつかトモミさんの家に行った時に、
銀行にある様な、部屋半分ぐらいの大きさの金庫があったぐらいだ。

トモミさん自身の買い物も済んで、夕食のすき焼きを食べに行った。
ここでも会計時に驚くぐらいの金額を奢ってもらった。

そしてそのまま同伴して、花ごころへと向かった。

その後も、トモミさんには色々と懇意にしてもらう事になる。

ホスト生活2日目にしてみんなに恐れられているトモミさんに同伴をしてもらった俺。

やっぱりホストって俺の天職なんじゃないか...？

このまま一気にのし上がってやる！

そう言う調子に乗った思いは、すぐに消え去った。

その後しばらくは全く指名も取れなかったし、同伴も出来なかったからだ。

ホストクラブでは、人気があるほど更に人気が出やすいシステムになっている。

店に初めて来る新規客（ホスト業界ではこれを本番と呼ぶ）が来店すると、まずNo.1のホストがつく事になる。

No.1が忙しいときはNo.2と言うように、上位のホストから付く。

新規客をてっとり早く店の顧客に取り入れる為には、確かに効率がいい...

しかしその反面、下位のホストにとっては中々本番に巡り会えず、結果指名が取りにくくなるのだ。

別にそれを言い訳にするわけではないが、

中々指名が取れない苦難の日々はここから始まる事になる。

さて、2日目。

トモミさんと同伴してきた俺にキョウヘイが茶々を入れる。

「やりますね一雄一さん、トモミさんと同伴！

普通あの人と同伴なんて出来ないですよ」

それが、新人だから同伴出来ないと言う意味なのか、精神的なものなのかはわからないが。

そして、その会話に割って入って来るホストが1人。

「2日目から同伴なんて、流石っすね！」

ユウキだ。

彼は、いかにも元ヤンキーな、イケイケの男だった。

当時は17~8歳くらいだっただろうか。

とにかく喧嘩っ早くて、花ごころの切り込み隊長と言う感じだった。

当然、後輩にも厳しく、上下関係をきっちりする男だ。

しかしこのユウキ、俺に対して特に礼儀が正しいのは、年令の差以外に別の理由があった。

俺がアウトローの時代に、俺のシマにひとつの暴走族を立ち上げていた。

言わば会の創始者だ。

極勇会と付けたその団体は、立ち上げ当初は50名程度の規模だったのだが、
どんどんその勢力を増して、その当時は200名くらいの団体になっていた。

実はユウキはそのメンバーだった。

俺はユウキの顔を知らなかったが、向こうは当然俺の顔を知っていた。

新人ホストとして俺が店に入ってきたときは、
さぞビックリしただろう。

しかもユウキは人気もあり、店ではNo.2～3の順位だった。
俺はと言えば、当然この時点では店での順位は最下位。

今思えば、あんなに立場が強かった俺が、
ホストとしてはユウキの下に位置していると言うことを、
無意識にユウキは優越感を持って居たように思う。

しかしあくまでそれはユウキの内心を勝手に想像しただけで、ユウキは俺の事を立ててくれていた。

このユウキ絡みで、
この後のひと騒動を引き起こす事になるとは、この時は思っていなかった。

ポリス

ユウキとの会話は続く。

「いやいや、たまたまカツヤ君のおかげで同伴してもらえただけだしな。」

「いや、でも雄一さんならすぐに人気が出ますよ！頑張ってください。」

頑張ってください...か。

ユウキの言葉が妙に上から言ってるように聞こえたが、まあいい。

そのうち巻き返してやる。

「そう言えば極勇会の方はどうだ？」

最近話を聞いてなかったのも、会の事が気にはなっていた。

「俺はもう抜けて居ないんですけど、順調にやってるみたいですよ。

あ、そうだ。雄一さん、ケイジさんを覚えてますか？

雄一さんが店に来る事を話したら、会いたがってましたよ」

「ケイジ.....ポリスか？」

ケイジと言うそいつは、俺が義勇を立ち上げたときに居たメンバーの1人だ。

あだ名は、ケイジ（刑事）だからポリス。

ユウキの先輩にあたる。

ポリスは、お坊ちゃんだった。

普通暴走族になるような奴ってのは、
家庭が複雑だったり、最初から何処か尖ってる様な所もあるのだが、
ポリスの家は全く普通の家庭だった。

むしろ親は公務員をやって居る様な、躰に厳しい家だった。
確か最初は学校の成績もかなり良かった筈だ。

そんな、ごく真面目で順調な中学時代を過ごした様だが、
あるきっかけで、高校の途中で”不良デビュー“してしまった。

出会った当初は、黒髪でオドオドしていて、
いかにも”真面目くん”って言葉が似合っていたポリス。

そんなポリスも、段々と場数を踏んで行く度に、気合が入って行った。

最初はポリスの事をからかっていたメンバーも、
色々な事を一緒にやって行く度に段々と仲間意識を持つ様になったのか、
いつしかポリスは極勇会に欠かせないメンバーになっていた。

「そうか、俺も久し振りに会いたいと伝えて置いてくれ。」

「うっす、伝えときますね！」

この事がきっかけでポリスと会う事になったのだが、それが思わぬ事件を起こす事になる。

話は戻り、2日目の花ごころも盛況だ。
トモミさんに着いた後は、色々な人のヘルプに付いた。

ホストと言う仕事は、決して楽で楽しいものではなかった。
少なくとも俺にとっては。

とにかく、客はストレスを溜めている。
その発散に店に来ているんだから、楽な筈はない。

別に女に不自由していなかった俺にとっては、女と話す事が楽しい訳じゃなかった。

この頃は、仕事としてホストをやっている意識が強く、
辛いけど頑張らなきゃと言う思いが強かった。

ホスト業界は狭いもんで、色々な情報が筒抜けで入ってくる。
俺が仙台から帰って来た事も、瞬く間に広まったようだ。

前にも書いたが、この頃のホストは元ヤンが多かった。

俺もそうなのだが、過去に付き合いのあった先輩や後輩が他店で働いていて、
それらの店に挨拶に行く事も多かった。

「何か困った事があったら言ってくれ」

他店で働いているホストの先輩から、声をかけてもらう事もしばしば。

当時、ホストの店同士の諍いは結構多かったのだが、
俺は他店に知り合いが居た事で、ホストとしてやりやすかったのも事実だ。

そうしている間に、ポリスとの約束の日が近づいて来た。

久々に会うポリス。

俺は奴がどう変わってるか楽しみだった。

しかし、約束の日にポリスと会う事は出来なかった。

スウィートヘブン

「ケイジさんがやられました！」

いつものように開店の準備をしている俺に、
ユウキが真剣な顔をしてそう告げた。

ポリスとの会う約束をしていた、2日ほど前の事だった。

「...何やらかしたんだ？」

正直、喧嘩をする事自体は特別珍しくない。
暴走族だからな。

しかし、今回の喧嘩は少し事情が違ったようだ。

「ケイジさんをやったのは、スウィートヘブンの奴等です。」

スウィートヘブン...初耳だった。

何か暴走族らしくない名前だな...そう思っていると、
横からアツヒコ君が会話に入ってくる。

「スウィートヘブンか、あそこタチが悪りいんだよな」

アツヒコ君も、花ごころで働いている先輩ホストだ。
しかし俺よりも歳は下の為、君付けで読んでいる。

「アツヒコ君も知ってんの？」

暴走族上がりではない彼が知っている程、
そのスイートヘブンと言う団体は大きいのかと思ったが...どうやらそうではないらしい。

「スイートヘブンはキャバクラですね。」

「.....キャバクラ？」

予想外の答えに拍子抜けした声が出てしまった。

「何でキャバクラなんかにポリスがやられんだ？無銭飲食でもしたのか？」

「いや、雄一さん。あそこはボッタクリっすから。
それでそのポリスって人、被害に遭ったんじゃないすか？」

アツヒコ君がそう言ったが、それも少し違ったようだ。

「いやアツさん、確かにボッタクリが関係してるんすけど、
ケイジさん本人がその被害に遭った訳じゃないらしんすよ。
何でも、ボッタクリの被害に遭おうとしてる人を助けようとしたらしくって...。
それで店の奴から袋叩きにあっただけらしいんです」

「ボッタクられようとしてる人を助けた...？」

何と言うか...呆れる程お人よしだ。

ポリスは、昔から正義感の強いやつだった。

極勇会の中でも、汚い事や曲がった事にはとことん反発していた。

「そうです。でも、たまたまって訳じゃなく、
ケイジさん前からあの店に対してイザコザがあったみたいすからね。」

後にわかった事だが、ポリスの連れが店にぼったくられた事もあったらしい。
きっとそう言った鬱憤が溜まってたんだろう。

「マジで奴ら調子に乗ってるからな。この間俺も揉めたわ。
俺の客でたまたまその店で働いてる娘が居ただけど、
その娘が帰ってから俺の携帯にボーイから連絡がかかってきて、
”てめえうちの店の従業員たぶらかしてんじゃんーよ”だと」

どうやらそのスウィートヘブンって店の奴等は、相当タチが悪いらしい。

折角久々にポリスに会えると思ったのに、また今度になりそうだ。

「とにかく、そんなだったら明後日会うのは難しそうだな。」

「難しいどころじゃないですよ！
...ケイジさんまだ意識戻ってないんですから。」

「...何だって？」

ボッタクリ抗争開始

詳しく話を聞くと、ポリス1人に対し、
よってたかって5～6人ぐらいが袋叩きにしたらしい。

警察が来た頃には、すでにスウィートヘブンの奴等は消えていて、
瀕死のポリスが道端に転がっていたそうだ。

...俺は、何とも言えない気持ちになっていた。
俺はポリスを可愛がっていたつもりだし、ポリスも俺を慕ってくれていた。

正義感を出したが為にやられてしまったポリスが不憫でならなかった。

と同時に、複数の人間でポリスを袋叩きにしたスウィートヘブンの奴等に対し、
どうしようもない怒りが込み上げてきた。

いつの間にか俺は、今自分がホストでいる事を忘れていた。
喧嘩に明け暮れて、ギラギラしていた頃の自分が戻ってきていた。

「.....雄一さん。」

そんな俺の雰囲気を感じてか、ユウキがおずおずと声をかける。

極勇会の頃から、こんな俺を何度も見てるユウキ。
そして、こうなったらもう止めても聞かない事も知っていた。

「店の場所を教えてくれ。」

「や...でも、もうすぐ開店だし、店はどうするんですか？」

出なかったら罰金になりますよ」

花ごころでは、遅刻や欠勤に対して罰金を取っていた。

「...まだ開店まで2時間ちょっとある。
それまでに戻れなかったら、罰金でも何でもしてくれ」

「カツヤさん怒りますよ」

「...関係ない」

「.....行くんですね」

俺が話を聞かない事を確認したユウキは、どこか嬉しそうだった。

「それでこそ雄一さん！俺もお供しますよ」

そう言って拳を叩く。

喧嘩っ早いユウキならそう言うと思った。
花ごころの切り込み隊長の名は伊達じゃないな。

「じゃあ案内してくれ。」

そう言って立ち上がった俺らに、声がかかる。

「俺も行く」

アツヒコ君だ。意外な参加者に、俺とユウキは顔を見合わせる。

「や、でもアツヒコさん。喧嘩しに行くんですよ？」

ユウキが言う。

「俺もあいつらには嫌気がさしていたからな。
それに、そのポリスって人の話を聞いてたら我慢できなくなってな」

どうやらアツヒコ君も正義感のある情に厚い人らしい。

「よし、じゃあ行こう」

俺ら3人は、同じく店にいたワタル君に上手く理由を作り、外に出た。

今考えると、新人が準備もせずに外出なんてとんでもないな。

スウィートヘブンを目指す3人。

ユウキが歩きながら話しかける。

「...正直、雄一さんが店に入ってきて、少し丸くなったかな？って思ってたんですよ。
ホラ、客に靴でビール飲まされたりしてたじゃないですか」

「でも、店から出るとやっぱり昔の雄一さんっすね」

「昔の俺とは違うつもりだけどな。でも今回は別だ」

「でも、そういつて喧嘩に行く顔の雄一さん、嬉しそうですよ」

そんな顔をしていたのだろうか。

俺が仙台に行っていた理由をもう一度思い出し、戒める。

(...やりすぎてはいけない)

そう思っていると、目的の店が見えてきた。

スウィートヘブンは、歌舞伎町一番街から少し脇に入った通りにあった。

キラキラしたネオンが、男と言うエサを待ち構えているようだった。

入り口付近を見ると、今まさに客引きがエサに声をかけている最中だった。

「さ、どうですかお兄さん！ 1時間3,000円、1時間3,000円ポツキリですよ！」

いかにもなポツタクリの常套句だが、この時代は本当にそう言っていた。

声を掛けられているお兄さんと呼ばれている人は少し困った様子をしていた。

「...行くぞ」

俺はユウキとアツヒコ君にそう言うと、店の横にあったゴミ箱を思い切り蹴とばした。

ドガンッ！！

ガラガラガラ...

周りの視線が一気に集まる。

客引きも驚いてこっちを振り返っている。

俺はゆっくりと客引きの方に歩いて行き、一言。

「おう、責任者呼んで来い」

客引きのヤス

俺は睨みを聞かせてそう言い放った。

しかし客引きも夜の仕事、こういうケースの対応には慣れているのだろう。

「んだ、テメーは！」

鼻息のかかりそうな位置まで顔を近づけた客引きが突っかかってくる。

「テメーん所の従業員にツレがやられたんだよ、さっさと責任者出せや」

「ツレだあ？知らねーよンなもん！帰れボケ！」

「知らねーんじゃねーんだよ、こっちはやられて意識戻ってねーんだよ！」

ユウキが入ってくる。

「知らねーよ！」

なるべくここでは争いたくなかったので穏便に行くつもりだったが、事はそう上手く運ばないようだ。

何より、ポリスがやられたと言う怒りを抑えるにも限界があった。

...ギュツと拳に力が入る。

「なあ...出してくんねーかな.....」

「知らねーつつてんだろボケ！！」

そう言って客引きが、俺に向かってツバを吐いた。

ーピチャッ

客引きの唾液が、トモミさんから買ってもらったスーツの胸元に付く。

その瞬間、俺の中で何かが弾け、拳を振りかぶる。

「さっさと帰ッッ.....」

ドカッ！と言う鈍い音と共に、客引きが言葉途中で吹っ飛ぶ。

.....殴ったのは俺じゃない。

俺が殴ろうとした瞬間、客引きの脇腹に一発、蹴りが入ったのだ。

アツヒコ君だ。

客引きはズザザッと地面を転がり、店の看板に頭をぶつける。

きゃあ、という女の声が周囲から聞こえた。

「テ...テメエ...！」

客引きがアツヒコ君を睨む。

アツヒコ君は、手と首をプラプラさせながら喧嘩の準備をしていた。

ヒュウ！とユウキが喜ぶ。

すると、騒ぎを聞きつけたのか、店内から黒服が2人出てくる。

「ヤス、何の騒ぎだ。」

一人が客引きに向かって話しかける。

「こいつら、昨日のガキのツレらしいっすよ...」

ヤスと呼ばれた客引きは、あっさりポリスの件を認めた。

「てめえ！やっぱり知ってんじゃねーか！！」

ユウキが憤る。今にも飛び掛かりそうな勢いだ。

俺はユウキを手で制し、黒服達に言う。

「その事で話があんだよ」

黒服たちは、お互い顔を見合わせて一回頷くと、

「来い」

そう言って、店内に入って行った。

俺らもそれに続き、店内に入る。

ピンチ

店は営業をしていたが、開店したばかりのようで客はまだ1人も居なかった。

チラホラと店の女の子たちが居て、こちらの様子を伺っている。
店の中からもさっきの騒ぎが聞こえたのだろう。

黒服たちが奥の席の前で立ち止まり、一人が奥へと消えて行った。

少しして、奥からグレーのスーツを着た男が、黒服と一緒に戻ってきた。

グレースーツの男は俺らを一瞥して、席に腰を下ろす。
続いて黒服の一人も腰を下ろす。

二人が座って、俺ら三人と黒服の一人が立つ構図だ。

グレースーツの男が煙草に火をつけて一息吸い込む。

「……で？」

軽蔑をするような目で俺らを見てそう言った。

「お前が責任者か？」

「ちょっと違うが...似たようなもんだ。」

俺はなるべく感情を押し殺して、冷静に努めて言った。

「昨日、俺らの仲間のケイジってもんがアンタん所の従業員にやられた。
そいつは今病院で意識が戻っていない」

意識が戻っていない、と言った所でグレースーツの男に少し反応があった気がした。

「フン.....で？」

「で？じゃねーんだよテメ...」

「証拠は？」

憤るユウキの声を遮ってグレースーツは言った。

「...証拠はあるのか？」

もう一度煙草を吸いこむグレースーツ。

「お仲間、意識が無いそうだな。そりゃ、ご愁傷様。
けど、意識の無い奴がどうして俺らがやったって言えるんだ？」

確かに...

ユウキはどうやってスウィートヘブンの連中の仕業と分かったんだろう。

「それは、ケイジさんが助けようとした奴から...聞いたんだよ！
お前らがカモにしようとしたやつから！」

その時、ユウキの言葉に間があった。

(助けようとした奴から...聞いたんだよ！)

グレースーツはその一瞬の間を見逃さなかった。

「お前が直接聞いたのか？
その”助けようとした奴”とやらから」

「.....いや、直接じゃねえ...。直接じゃねーけど、
俺の仲間が直接そいつから聞いたらしいんだよ！だから店のこの人達と来たんじゃないか！」

どうやら、ポリスが助けようとした奴...つまり目撃者で、警察への通報者は、
事件の概要を極勇会の別のメンバーに伝え、そのメンバーからユウキが聞いたらしい。

「らしい？また曖昧な理由で動くんだな。
つまりお前は、直接本人からもその目撃者からも聞いていない。
又聞き程度の信憑性の低い情報で、ここまでしでかしたのか？
聞き違いだったらどうする？嘘の情報だったら？」

「るっせーんだよ！！」

ユウキが叫ぶが、グレースーツの舌戦に引き込まれそうになっていた。
この男、言葉尻を捉えるのが上手い...

このまま奴のペースに巻きこまれてはいけない。

俺は一步前に踏み出し言った。

「どーでもいいんだよんな事は。
仲間がやられたのは事実で、俺はコイツが言った事を信じてるからな。
それに、入り口の客引きは認めませ」

「ふん...しかし間違いだったらどうす...」

「御託はいいんだよ！！！」

突然の俺の大声に、今度はグレースーツが遮られる。

「...俺たちや喧嘩しに来たんだよ」

ピン...と空気が張り詰める。
臨戦態勢に入る俺。

今にもグレースーツに飛び掛かろうとしたその時、
グレースーツの右手が動いた。

人差し指を、アツヒコ君の前で止める。

「お前...花ごころのホストだな？
.....以前、うちの従業員をたぶらかしてくれたそうだな。」

「.....」

...アツヒコ君とスウィートヘブンの間には確執があった。

確かに顔を知られていても
おかしくはない。

そしてユウキの方を見てさらに続ける。

「お前。.....さっき、”だから店のこの人達と来た...”と言ったな。
”店のこの人達”...か。」

「お前たち三人とも花ごころの従業員か。」

.....マズい。

確かに、喧嘩に来たのはあくまでポリスの件だ。

しかし、花ごころのホストが三人で殴り込みに来たとなれば、
花ごころ対スウィートヘブンの、店同士の抗争になってしまう。

それは、カツヤ君やワタル君、
そして他の従業員まで巻きこんで迷惑をかけてしまう事を意味していた。

...考えが浅はかだった。
俺は、感情に任せて短絡的に行動したことを悔やんだ。

「ホスト風情が偉そうにしてんじゃねーよ！！！」

今度はグレースーツが声を張る。

ガンッ！とテーブルを蹴ると、店の女の子たちからキャッと悲鳴が上がる。

「言っとくがなあ、お前らカメラに撮られてんだよ。防犯カメラ。
手を出してみろ、お前らの店は終わりだぞ？」

グレースーツがそういうと、黒服の二人もニヤニヤと笑みを浮かべる。

しばらく俺らは黙って立っているしか出来なかった。

.....悔しい。

ポリスはこんなやつらに、成す術もなくやられたのか。

「...おう、何突っ立ってんだよ。分かったらさっさと帰れ。」

出口の方をアゴで指して、グレースーツがそう促す。

どうする？一旦出直すか？

しかし、出直した所でもう顔は割れている。

(...一旦ユウキ達を店に返し、俺一人で戻って来よう)

そうすれば、店など関係なくやれる。

出よう、とユウキ達に告げようとしたとき、黒服の一人が言う。

「そのまま帰れると思うなよ。

.....おい、お前ら土下座しろよ。

...アケミちゃん、事務所からカメラ持ってきて。」

店内の女の子の一人にそう指示する黒服。

俺らの土下座の姿を、写真に撮るつもりようだ。

「雄一さん...もういいツスよね？
...やっちゃいましょうよ...関係ねーすよ」

ユウキだ。

見ると、目が座っている。

完全にキレている時のユウキだ。

やばいな...こうなったユウキを止めるのは一苦労だ。
とは言え俺も、自分を抑える事が出来るかわからなかった。

アケミちゃんと呼ばれる子がカメラを持ってきて黒服に渡す。

「おう、そこに並べ、そんで土下座しろ。」

黒服がニヤ付きながらそう言う。
ユウキはもう今にも殴りかかろうとしていた。

俺ら三人と奴ら三人。

その均衡を破ったのは、大きな衝撃音だった。

ガシャアアアアン！！！！

一瞬、何が起こったかわからなかった。

そして次の瞬間、俺とユウキの間に居るアツヒコ君が、
前のめりに倒れて行った。

砕け散るビンの破片と、液体。

後ろを振り返ると、客引きのヤスが割れた瓶ビールの先端を持って立っていた。

アツヒコ君が、後ろからビール瓶で殴られたのだ。

七人のホスト

「アツヒコ君！！」「アツさん！！」

倒れ込むアツヒコ君。

すかさずユウキが、客引きのヤスに殴りかかる。

ゴッ！！

割れたビール瓶で応戦しようとしたヤスだが、ユウキの拳の方が早かった。

素早い拳を頬に受けて、のけぞるヤス。

黒服やグレースーツは、ヤスの余計な行動に驚いていた。

奴等はこっちから手を出させようとしていたから、先に手を出してしまったら自分たちが不利になってしまうのだろう。

明らかに狼狽の色を見せ、しかしすぐに奴らも臨戦態勢に入る。

こうなったらもう止められない、ヤスの行動が引き金となり、一気に均衡が崩れようとしていた。

—しかし、1、2発拳が飛び交ったくらいだろうか。

乱闘になかけていた店内は、第三者によって中断される事になる。

ウウウウウウウウ

—サイレンの音。警察だった。

その場の全員の行動が一瞬止まる。

サイレンは店の前で鳴りやんだ。この店に入ってくるようだ。

「おいつ！」

グレースーツが叫ぶと、黒服が急いで入り口まで走り、店の鍵をかける。

(...コイツラが呼んだんじゃないのか?)

俺達も今ここで警察に厄介になる訳には行かない。

何の関係もない花ごころの他のスタッフに迷惑になるような事は避けたかった。

グレースーツは、店内の女の子に割れたグラスを片付けるように指示している。
どうやら、入り口の鍵は時間稼ぎのようだ。

「おい！裏口から外に出ろ！」

黒服が俺たちに指示する。

...こっちはアツヒコ君をやられている。

何とも煮え切らない気持ちだったが、
一旦出直すしか方法は無かった。

警察が来た以上、このまま暴れられない。

...後で俺だけ引き返して来よう。

意識が朦朧としているアツヒコ君の肩を俺とユウキが抱え、
グレースーツの脇を通過して裏口へと急ぐ。

「クソガキが.....このままで済むと思うなよ...」

グレースーツが吐き捨てるように言った。

俺は思いっきり睨み返し、店を後にした。

店から外に出て、まずアツヒコ君を病院に連れて行く。

アツヒコ君は頭から血を流していて、意識も曖昧だった。

「...ぶっ殺す...あの客引き...」

独り言のようにそうつぶやくアツヒコ君。

俺とユウキは、二人とも消化不良の顔をしていた。

病院で頭に包帯を巻いてもらうアツヒコ君。

一今日一日、酒も飲まず安静にしているように。
医者言葉を後に、店に戻る俺ら3人。

店を巻きこんでしまうという最悪の事態は避けだが、
こうなったら店の皆に話さない訳には行かなかった。

俺らが店に戻ると、包帯を巻いたアツヒコ君に驚いた皆が集まってくる。

「どうした!？」

「何があった？」

さっきは居なかったカツヤ君も店にいた。

「実は…」

店の全員が集まった中、今までの顛末を話す。

ポリスの事、

ボッタクリの事、

店に迷惑が掛かりそうだった事...

話の途中でカツヤ君を見ると、明らかに怒りの表情を見せていた。

...そりゃそうだ、下手すりゃ店が営業停止になっていたからな。

一通り話し終えたところで、カツヤ君がテーブルを拳で叩く。

「すみません...あの後、警察と奴らがどうい話をしたのかはわかりません。
もしかしたら花ごころの名前を出しているかも知れませんが...。
けど、これ以上は店に迷惑をかける事はしないんで。」

「.....お前、それでどうするつもりだ？」

「.....すみません」

俺はこの後、一人で奴らの所に向かおうと思っていた。
単独で行けば、最悪俺一人の処分で済む。

「お前、一人で行こうと思ってんじゃないだろうな？」

「.....はい」

「ふざけんなよ...俺らも行くぞ。」

「...えっ？」

「えっ？じゃねーんだよ、
テメー一人でウサ晴らししようとしてんじゃねーよ！
おいてめえら、行くぞ。」

「いや、でも花ごころは...」

「臨時休業だ！アツヒコやられて黙ってられっかよ！」

カツヤ君の怒りは、店を巻きこもうとしていた事じゃなかった。
アツヒコ君がやられた事に対して怒っていた。

見ると、カツヤ君だけじゃない。
他のホストも皆ギラギラと目を輝かせていた。

...ホストって、軟派でナヨナヨしてんじゃなかったのかよ！？

一人の為に仇討ちって...これじゃ不良の世界と変わんねえな。

俺のホストに対する印象は、この頃から少し変わり始める。

「でもカツヤ君、もしこの店が営業停止くらったらどうするんすか？」

「お前、ボッタクリ店が警察に駆け込むと思うか？
自分たちがパクられるから、よっぽどじゃねーと警察沙汰にしねーよ。」

...考えてみれば、そうだ。

さっき警察が来た時も、なかった事にしようとしたじゃないか。

...という事は、店を巻きこむと言うさっきのグレースーツの言葉はブラフ...

俺はまた自分の頭の回らなさに腹が立った。

「...俺もいきますよ。」

アツヒコ君だ。

「アツヒコ...お前頭は大丈夫か？」

「大丈夫っす、俺もいきます。」

頭に包帯を巻いたままのアツヒコ君も行くことになった。

そして、その時店にいた全員...

俺、

カツヤ君、

ワタル君、

アツヒコ君、

ユウキ、

キョウヘイちゃん、

それともう一人、店にいたシュンさん。

この七人のホストで、再度スイートヘブンに向かって行った。

決着

やられた仲間の為、スウィートヘブンに向かう俺ら七人のホスト。

店の前には、客引きのヤスは居なかった。
どこか離れた所で客引きをしているのかも知れない。

カツヤ君が先頭に立って、扉を開けると、
店内には2、3組客くらいの客が席に着いて酒を飲んでいるようだった。

「いらっしゃいませ」

さっきは見かけなかった黒服が声をかけてくる。

普通に見たら、俺ら七人、団体の客のように見えたのだろう。

しかし、カツヤ君はそれを無視し、
通り過ぎて店内に入る。

そして、店内中に響き渡る大きな声で叫んだ。

『みなさーん！この店はボッタクリですよ〜！！
今すぐ出た方がいいですよーー！』

店内の視線が一気にこっちに集まる。
と同時に、店内の各所にいた黒服が一斉に寄ってきた。

俺はその中に、さっきの黒服を見つけた。

俺らに土下座をさせようとしていた、あの黒服だ。

「よお」

そいつに話しかけるやいなや、すかさずパンチを叩きこむ。

ガッ！！

その俺の行動が引き金となり、一気に乱闘状態になった。

罵声と、怒声と、悲鳴と、物音が響き渡る店内。

前の誰かを殴ったと思ったら、後ろから誰かに殴られる。

どこからか物が飛んでくる。もちろん誰が投げたかわからない。

背中に誰かぶつかって来たので振り向くと、
アツヒコ君に殴られて吹っ飛ばされたヤスだった。

ヤスはいつの間にか店内に戻り、乱闘に参加していたようだ。

カツヤ君は、テーブルにあった灰皿を武器にしていた。

ユウキは、いかにも楽しそうに喧嘩していた。

こちらよりも人数が多いスウィートヘブンの連中を相手に、
ホスト七人は大暴れしていた。

...20分程暴れた頃だろうか、俺はある事に気づいた。

(グレースーツの奴がいねーな...)

店内は混乱していた。

しかし、何度探してもグレースーツの男は見つからない。

...奴は店内に出て来ていない。

俺は乱闘を抜け出し、店のバックヤードへ向かった。

バックヤードのドアを開けると、
数人の避難していた女の子達と一緒に、
防犯カメラのモニターを見ていたグレースーツが居た。

まさか来るとは思っていなかったんだろう。
突然の俺の襲来に、明らかに動揺している。

俺はズカズカと向かって行く。

「ま...まで...」

バキッ！

乱闘によって興奮状態にあった俺は、何も言わずにグレースーツを殴る。

そして胸倉を掴み、顔を寄せる。

「よお、帰ってきてやったぜ...！」

そう言って、もう一発。

グレースーツの男は、先ほどの威勢はまるで無かった。
逃げるように、俺の敵意を避けている。

「わ、わかったから、よせ...」

抵抗をしないグレースーツに拍子抜けした俺は、掴んでいた胸倉を話す。
ヤツは乱れたスーツの胸元を整えながら、

「...何をすればいい」

...結局、こいつの威勢は口だけだった。
俺はその場で、ポリスへの謝罪と治療費の負担を約束させて、店内に戻っていった。

店内では、乱闘は既に収まりつつあった。
スウィートヘブンの連中は、ほとんどが座っているか、倒れていた。

...花ごころの人達はと言うと、全員が立っていた。

(何なんだよ、この人達.....)

「おう雄一、終わったか。」

カツヤ君がそう尋ね、俺はコクリと頷いた。

「おうテメーら！ポツタクリなんてチンケな商売してんじゃねーぞお！！
こっちは命かけてホストやってんだよ！
文句があんならいつでも”花ごころ”に来いや！！」

最後に、カツヤ君がそう啖呵を切って、店を後にした。

「あー、スツとしましたね！」

ユウキが帰り道にそう言う。

「思ったより早く終わったけど...
どっちにしろ今日は営業出来ねーな」

笑いながらワタル君が言った。

皆の顔を見ると、傷やアザがチラホラ。
...しかし、どれもとても喧嘩した後の顔じゃなかった。

「みんな、殴られなかったんすか？」

俺がそう聞く。

「殴られたに決まってるよ。でも、顔は死守しなきゃな。
商売道具だし。顔を守ったからボディを重点的に殴られたよ。」

「ホストとアイドルは顔が命っすからね！」

ワタル君とキョウヘイちゃんが答える。

二人は当時ジャニーズJrにも所属していたから、顔には特に気を使ったのだろう。

俺はと言うと...顔を守ると言う意識は無かった。
興奮して、目の前の相手を倒す事だけを考えていた。

...これがプロ意識って奴か。

「でもカツヤ君、最後あんな啖呵を切って、
奴らが店に復讐しにきたらどうするんですか？」

「あ？その時はまた追い返せばいいだろ。
あのな雄一、自分を名乗れないようなセコイ生き方してたら、
この歌舞伎町ではのし上がっていけねーぞ」

その言葉が妙に心に残った。

結局、その後スイートヘブンの連中が店に仕返しに来ることは無かった。
やつらも、叩けば埃が出る。警察沙汰にもしなかったようだ。

ポリスは、あの事件から2、3日して意識を取り戻し、順調に回復していった。

スイートヘブンから医療費や示談金などを受け取って欲しいと申し出があったらしく、
驚いていた。

「雄一さん、俺が寝ている間に何かあったんですかね？」

見舞いにきた俺に、ポリスが尋ねる。

「さあな。...ま、有難くもらっとけ。」

俺らの乱闘の事をポリスは知らなかったようなので、俺はそうとぼけて病室を後にした。

(...まあ、結局後でユウキの口からこの事件はポリスに伝わる事になるんだが。)

そういえば、事件の後で、花ごころに新しい顧客が増えた。あの時、スウィートヘブンで働いていた女の子たちだ。

曰く、俺らが乗り込んできて暴れたあの事件を見て、ファンになったそうだ。

彼女たちも、店の方針に対して反感を持っていたらしく、来るたびに愚痴を聞かされた。

「カツヤ君、格好よかったよ〜！」

「指名はキョウヘイでお願いしまーす」

「ドンペリ1本、入りましたー！」

花ごころには、賑やかな声がいつまでも続いていた。

初給与

スウィートヘブンの一件は、歌舞伎町界限でちょっとした話題になった。

と言っても、眠らない町、歌舞伎町。

そんな事件は瞬く間に次の話題にかき消され、
皆新たな話題に華を咲かせる。

花ごころも、事件後にはスウィートヘブンの女の子たちが飲みに来てくれて、
盛況を見せた。

.....が、それは一部の話。

No.1のキョウヘイちゃんや、オーナーのカツヤ君などは景気が良かったようだが、
俺はというと、相変わらずの指名がつかない日々が続いていた。

結局、カツヤ君に美味しい所持っていかれたようだ。

「二日目にトモミさんと同伴してから、もう二週間以上は経っているな...」

ひとりごとの様に指折り数える。

仙台から歌舞伎町まで、スーツ一着でやってきてから早二週間。
当然、泊まる部屋の事など何も考えずにやって来ている。

得意のポジティブ思考とハングリー精神で、何とかなると思っていた俺。

カツヤ君や、古い知り合いの家などを転々としていた日々だったが、
スウィートヘブンの件があつてからは、
妙にアツヒコ君と仲良くなって、良く泊めてもらっていた。

と言っても、アツヒコ君も当時そんなに売れていた訳じゃない。
ボロアパートに帰って、二人でカップラーメンを半分ずつ食べたりなんて事もあった。

ある時は、電気代が払えずに夏場に電気を止められてしまって、
クーラーの効かないどうしようもない暑さの中、
部屋の真ん中に氷の塊を置いて二人で寝た事もあった。

ホストの就寝時間は昼だから、耐えがたい熱さなんだ。

後は、ジュンさんの家や、カツヤ君の客の家に泊まらせてもらってもいた。

余談だが、カツヤ君の客は女性二人で住んでて、
そこに泊まらせてもらった事もあるのだが（勿論、枕的な事は何も無い）、
同居している女の人の当時付き合ってた人が、
歌手？プロデューサー？ヒットメーカー？の超有名な〇〇〇で、
一緒の家で寝泊まりした事もあった。
まあ当時はその人も売れていなかった時代で、月収8万円とか言ってたな。

とにかく、ホストの私生活は、夜の華やかな顔に比べて酷い事が多い。
特に、売れていないホストや新人なんかは、苦学生のような生活を強いられる。

...そろそろ指名、欲しいんだけどな...

そう考えていた頃、花ごころに新人が入る。
新人と言っても、俺と二週間くらいしか変わらない為、二人とも新人。同期みたいなもんだ。

名前は、シゲキ。

歳は俺より2、3歳下だったが、同期という事もあり、シゲキとは以降長い付き合いをしていく事になる。

「シゲキです。よろしくお願いします。」

クールで甘い顔立ちのシゲキ。
眼鏡をかけていて、インテリに見える。

...やばいな、頑張らないと抜かれちまう。
俺はひそかにシゲキをライバル視し、負けないようにと心に誓った。

しかし、ホスト業界はそんなに甘いものでもなく、
シゲキも俺も、相変わらず一人も指名が付かない日々が続いた。

やる事と言えば、掃除に皿洗いに、他人のヘルプ。
たまに来る本番（新規客）は、上位ランクのホストに取られてしまう。

シゲキ共々、極貧の生活を続ける俺。
たまにヘルプに付いた時に食べれる店の料理が唯一のごちそうだった。

花ごころに入って一か月近く経ち、俺は初めての給料を心待ちにしていた。

指名はもらえないが、時間給はあるし、ヘルプにもついていた。
フル出勤をしていた俺は、そこそこ給料が入るんだろうと期待をしていた。

そして、ホストとして初めての給料日。
これで少しは生活が楽になるかな、とそう思って受け取った給料袋。

その中身は、3万円とちょっとだった。

一流ホストとの差

ホストになって、初めての給与は3万円とちょっと。

ホストの華やかなイメージとは裏腹に、
手に持つ給料袋の薄さが俺に現実を突きつけた。

実際の給料は、実はもう少し高い。
(それでも知れたもんだけど)

しかし、ホストには罰金制があって、
遅刻や欠勤、その他の違反などで給料から色々と差っ引かれていくのだ。

「カツヤ君...俺なんか違反しましたっけ？」

「え？お前この間欠勤したじゃん。ポッタクリ店に行った時。」

...ちゃっかり、この間のスウィートヘブンの件で欠勤したのも引かれているようだ。

当然、こんな給料じゃやって行けない人が大半だろう。
苦学生のような生活を強いられるのも領ける。

しかしながら、上位のホストになればその分報酬も増え、
見た事もないような金額を手に入れる事も可能だ。

ホストは皆、それを目指しているとも言える。

それに、ホストは給料以外でも、収入源がいくつもある。

”客からのプレゼント”もその一つだ。

実際、俺は給料よりもそっちの方が断然高価だった。

先日のトモミさんから買ってもらったスーツもそうだけど、数万、数十万のものをポンとくれたりもした。

ちょうどバブル期だった頃。

ホストの上客は、羽振りがいい人が多かった。

指名客じゃなくても、ヘルプに着いたホスト全員に何かを奢ったり、物をあげたりなんて事はザラだった。

真面目にコツコツと働いている人には申し訳なるくらい、一日で何百万と言う金が消費される。

バブリーな大人の世界。それが当時の新宿区歌舞伎町だった。

俺が、自分の給料袋を挟む指の近さに愕然としていたのと同時期、そんなバブリーな歌舞伎町を象徴する、一人の客と出合う事になる。

その客は一人で店に入ってきた。

第一印象は...なんと言うか、ちよつと。

お客に対してこういうのも何だけど、

「なんつー格好でホストクラブに来てんだ...」

そんな感じだった。

歳は三十代後半くらいだろうか。

上下にねずみ色の汚れたスウェット、
スニーカーで入店してきたからだ。

店の外で見たら、ホームレスだと思うだろう。

そのぐらい、他の客とは明らかに浮いていた。

しかし、態度は一丁前。

「No.1を出して」

開口一番、キョウヘイちゃん指名と来た。

指名も全くなく、暇していた俺も、その席にヘルプで着く。

朱里(シュリ)と名乗ったその客は、
いきなりドンペリを注文した。

当時の価格で一本10万円くらいだったか。

(オイオイ...支払い大丈夫だろうな)

そんな心配を余所に、乾杯をして飲み始める。

俺は、訝しむ目で朱里を見ていたのだが、
キョウヘイちゃんは、他の客と同様にいつものテンションで接客をしている。

見た目がどうであれ、客に対しては最高のサービスを行う。
当時の俺は、まだその精神を持っていなかった。

先日のスイートヘブンでの喧嘩の最中に顔を守っていた事といい、
その辺がプロ意識と言うか、まだまだ俺とキョウヘイちゃんの間には確実に大きな隔たりがあった。

小一時間ほど飲んだ頃だろうか。

「...帰るわ」

ドンペリを一本開けた所で、朱里がそう言って会計を促した。

流石に一本で金が足りなくなったか。
支払いを済ませ、朱里は早々に帰って行った。

...きっと、まとまった金が手に入って、
一度ホストで遊んでみたかったんだろうな。

そう思っていた。

しかし、翌日朱里はまた花ごころにやって来る。

最初は、朱里とは気付かなかった。

格好が全く違っていただけだ。

高そうなドレス、そしてアタッシュケースを手に持ってきた朱里は、昨日と同様、キョウヘイちゃんを指名する。

同じく、暇をしていた俺も、昨日との差に驚きながらヘルプに着く。

「ご来店ありがとうございます。」

丁寧にキョウヘイちゃんが御礼を言う。

「あなた、気に入ったわ。」

朱里がそう言って話しかける。

「昨日、あんな格好して驚いたでしょう？」

どうやら、昨日の格好はわざとしていたようだ。
ここから、驚きの展開が続く。

「私、月の小遣いが3,000万円なの」

そう言って、持っていたアタッシュケースを広げた。
その中身は、大量の札束だった。

そして、キョウヘイちゃんに対し一冊の本を渡さう言った。

「あなたに買ってあげるわ。何が良い？」

手渡した本は、車のカタログだった。
会って二日目なのに、車のプレゼントをするという朱里。

そしてキョウヘイちゃんが選んだ車は、なんとフェラーリのテスタロッサ。
当時2,500～3,000万円はする車だった。

車を選び終わると、朱里が立ち上がる。

「わかった。じゃ、それ買に行きましょう」

「え...今からですか!？」

そう言って、二人は店を出て行った。

目の前の出来事に啞然としていた俺だったが、

次の日、キョウヘイちゃんが本当にテストロツサに乗って店に来たのを見た時に、これは現実なんだとわかった。

それから朱里は何度も来店し、一日に平均で300万円は使っていた。指名はもちろんキョウヘイちゃん。

そしていつもの台詞。

「あんたたちは好きなものを好きなだけ飲んでいいから。」

月給3万円の俺、1日で300万円使う朱里。

感覚がマヒしそうだった。

朱里の羽振りはキョウヘイちゃんだけに留まらない。

ヘルプに付いた俺との会話で、俺が昔不良だった事を告げると、

「あんた、不良だったの？私、不良好きなのよ」

そう言って懐に10万円を入れられた事もあった。

朱里は、当時池袋か新宿の風俗の複数の店舗の会長だった。

風俗店に来る男性客が嬢に大金を使い、

そのお金で、風俗嬢や朱里のようなオーナーがホストで豪遊する。

男から女、そして男...

何とも形容しがたい、性の本能を表すようなビジネスの縮図だ。

しかしだからこそ、この時代はお金が大量に使われて、経済が潤っていた。

最初に朱里に出会ったのは、俺もキョウヘイちゃんも同じ。

上手くやれば、俺が気に入られていた可能性もあった。

しかし結果は俺とキョウヘイちゃん、天と地ほどの差がついた。

その理由は明白だ。

最初に汚い格好をしていたのは、朱里が俺たちの接客を試す為だった。

朱里の作戦にひっかかり、まんまと朱里を怪しんだ俺。

全力で初対面の朱里を楽しませ、気に入られたキョウヘイちゃん。

この差だ。

きっと朱里が大金持ちって事にキョウヘイちゃんも気づいていた訳じゃないと思う。

本当に見た目通りの客であっても、同じように接客していただろう。

悔しいが、現段階で俺がキョウヘイちゃんや他のホストに敵う筈がない。

それほどに、皆一流のホストだった。

ホストとしての顔

朱里の一件で、
俺がまだまだホストとして未熟である事をはっきりと突きつけられた。

未だに一件の指名もなく、これから自分がどう言うホストになるべきか、
自問自答していた。

「...どうしたの？何か悩みでもあるの？」

トモミさんだ。

ここは花ごころの店内。

常連のトモミさんが来店してカツヤ君を指名し、
俺と、同期のシゲキがヘルプに付いていた席で、そう指摘された。

「え！あ、いや...すみません。」

接客中は余計な事を考えないようにしていたつもりだが、
トモミさんにはバレバレだったようだ。

客にそんな心配をされる事自体、ホスト失格だ。

「テメー、客の前で浮かない顔してんじゃねえよ。」

カツヤ君にその場で注意される。

「まあまあ、人間だれでもそんな時はあるわよ。
...で、どうしたの？」

「実は、ここに入って2ヶ月くらい経つんですけど、
...俺まだ一件も指名が取れてなくて」

「...あ、それ僕もです」

シゲキが続く。

俺ら新人二人は、勤めてから今まで全く客からの指名がつかず、
よく二人でどうすればいいのか話していた。

ヘルプに入る時以外は、専ら掃除か皿洗いだ。

誰よりも早く店に来て掃除、そして雑用とヘルプをこなし、
一番最後まで店にいる。

そんな生活が続き、
自分は本当にこの店に必要なのかという罪悪感さえ芽生えて来そうだった。

「うーん。君たちだったら何とかなると思うけどね。
その内売れっ子になるわよ。それまで我慢してればいいんじゃない？」

「そう言ってもらえるの嬉しいんですけど、
何か全然売れる気しないんですよ...」

「お前らなあ、たかが数か月で泣き言言ってんじゃねーよ。
入ってすぐのお前らがいきなり売れたら、俺らの立場がねーじゃんかよ。」

「そりゃまあ、そうですけど。」

それでも俺は、早く売れたかった。

早く売れて顔を売って、この店のトップに...そして歌舞伎町のトップになりたかった。

「そうねえ、じゃあお姉さんから一つアドバイス。
君ら二人とも、まだ自然体なのよ」

「自然体、ですか...?」

「そう、ホストは自然体じゃなくて、”ホストの顔”を作らなきゃ駄目よ」

「いい?君らが勤務中もそれ以外でも同じ顔をしていたら、
客はどう感じると思う?
わざわざ高いお金を払って、普通の男を見に来ている事になるのよ。」

「”店の中でしか見せない顔”を作って、プレミアム感を出さなきゃ。
客があなた達の特別な顔を見たいと思えば、自然と指名は付くと思うわ。」

ホストの顔...今まで考えた事は無かった。
接客中も、素の自分をそのまま客にぶつけていた。

「それはあるな。例えば...あそこにいる、アツヒコを見ろ。」

カツヤ君がそう言って、アツヒコ君いるテーブルをアゴで指す。

そこには、とても接客とは思えない、客を罵るアツヒコ君がいた。

「よう、お前今日もブスだな！」

「知らねーよバーカ！」

「そんなに食うからデブになんだよ！」

客が怒って帰ってもおかしくないくらいの言葉だが、むしろ言われた方は、内心は喜んでいるみたいだった。

「...あいつはああいう接客なんだよ。まあ相手を選んじゃいるけどな。」

「でもあれって、お客さん怒らないんすか？」

「勿論、キレるような相手には言わんだろ。アイツの戦法は、貶して上げる作戦だからな。」

「貶して、上げる...」

「要するに、客から”こいつは基本的に口の悪い嫌な奴だ”って思わせる。もちろん本当に嫌な奴だったら客が不快に思うだけだから、その辺はテクニックだろうけどな。」

「そして、口の悪い中に、ごくたまに”優しさ”を取り入れる。
すると、普段が優しい奴が同じことするよりも、
何倍もアツヒコが良い奴に見えちまうって訳だ。」

「ははあ、なるほど...確かにアツヒコ君、
普段はあんなに口悪くないっすもんね。」

「Sの素質はあるだろうけどな。要するにあのスタイルが、
アツヒコの性格に合っていたって事だ。」

自分の性格に合った、ホストの顔を作る。
...俺は、どんな顔になればいいんだろうか。

「もう一人、例を出すわ。この店のNo.1はキョウヘイでしょ？」

「はい、そうです。」

「彼のエンターテイナーぶりは、本当に凄いわ。
店のどの席にいても、彼の盛り上げが耳について、
その存在感を無視できない。」

「きっと生まれながらに、人を引きつける才能を持つてるのね。
もちろん顔もいいけど。」

キョウヘイちゃんは、とにかくテンションを高く、
客を楽しませようとするタイプだ。

今では懐かしい、

ジュリアナ東京であったカラオケ大会で優勝した事もあるくらい歌も上手く、
ジャニーズJrに所属していたくらい顔もいい。
その頃玩具のCMにも出ていた。

そして、No.1だけど驕っている所が無く、自分が率先して盛り上げ役に徹している。
...朱里も、そういう所が気に入ったんだろう。

「わかるか？No.1があれだけやってんだ。
お前らみたいなペーペーが敵う訳ないだろ。」

キョウヘイちゃんと自分の差については、ついこの前思い知ったばかりだ。

「...俺、もっと勉強します。」

「そうそう、いい心がけよ。
さっきも言ったけど、雄一くとシゲキくんは見込みがあるわ。
ドンドン勉強して、売れっ子になってね。」

「はい、この店の先輩を参考にして頑張ります。
...でも、もっと色んなホストの人を見れたらいいんですけどね。」

俺がそう言うと、トモミさんは何かひらめいたようだった。

「良いわねそれ、行きましょう！」

「え、行くって何処に？」

「クラブ愛！」

！！

クラブ愛...現在の愛本店。

誰もが知っている、伝説のホストクラブだ。

ちなみに、2012年の今現在日本に存在するホストクラブで一番の老舗でもある。

1971年に実業家、愛田武が立ち上げた”クラブ愛”は、
瞬く間に新宿を席卷し、ホストクラブ=愛 のイメージを確固たるものとしていた。

当時でもクラブ愛の名は物凄く、
俺ら新人ホストにとっては雲の上の店だった。

「愛に行くんですか...？」

「そう、行った事無いでしょ？」

「そりゃ無いですけど...」

「じゃ、行こう！」

そうして、トモミさんに連れられて、
半ば強引に俺とシゲキは伝説のホストクラブに行くことになった。

伝説のホストクラブ 愛

男がホストクラブに行くだなんて...と言う話をたまに聞くが、
実は結構ある話だ。

男に興味があって行く人も中にはいるけど、
大抵の男性客は、キャバクラの客でキャバ嬢と一緒に来店するパターンや、
ホストが自分のお客さんと一緒に行くパターンだ。

ペーペーの新人ホスト二人。俺とシゲキ。

そして、花ごころの皆から恐れられている、
あのトモミさんと行く伝説のホストクラブ、”クラブ愛”。

...俺とシゲキは、完全に委縮してしていた。

「なあ、シゲちゃん。変な事になっちゃったな」

「そうですね...もう流れに身を任せます」

愛に到着し、地下に続く階段を降りる三人。

扉をくぐると、そこに待ち受けていたのは、目を疑うような煌びやかな光景だった。

赤、青、緑、黄色...

部屋の隅々にまで敷き詰められた電球に、度肝を抜かれる。
眼がくらむようなキラキラした店内は客で溢れ、物凄い活気を見せていた。

まさにバブルを象徴するような、豪華で絢爛な店内。
(ちなみに愛本店は今もこの内装のまま)

花ごころも活気は凄いが、何せ規模が違う。
せいぜい8卓くらいの花ごころに対し、ゆうに3~40卓はあるだろうか。

勤めているホストの数も半端じゃなく、
花ごころしか知らない俺たちはまさに、”井の中の蛙”状態だった。

「まるで夢の世界だな...」

ディズニーランドでは、ゲストに施設を没頭してもらうために様々な工夫が施されているらしい。
来園中は現実を忘れて、ミッキーたちとの夢の世界を満喫してもらう為だ。

それと同じように、ここは現実を忘れホストとの会話を最大限に楽しめるような、
そんな夢の空間が広がっていた。

「いらっしやいませ。ご指名は？」

「無いわ」

トモミさんと俺ら二人は、奥の席に通される。

「色んなホストがいるでしょ？良く見ときなさい」

そう言って笑みを浮かべる。

「何て言うか...凄いつすね。」

「いつもこうなんですか？」

俺とシゲキは落ち着きなく周りを見回す。

しばらくして、愛のホストが席にやってきた。

よし...折角連れてきてもらったんだ。

ライバル店だけど、このホスト達から色々盗んでやる。

そう息巻いていた所、突然席に着いたホストに話しかけられる。

「雄一！？」

「.....先輩！？」

席についたホストは、俺の暴走族時代の先輩だった。

「先輩、ホストやってたんですか！？」

「おう！久しぶりだな。お前が歌舞伎町に帰ってきたってのは聞いてたけど、まさかこんな所で会うとはな。」

俺が暴走族でヤンチャしていた頃、2~3コ上にその先輩はいた。

あまり絡みは無く、数回話した程度の先輩ではあったが、急に知り合いに会って、委縮していた気持ちが少し和らいだ。

「あら、知り合いだったの？」

「はい、昔の先輩です。偶然ですね」

「噂で聞いたけど、お前も今ホストやってんだって？何処の店でやってんの？」

「あ、はい。花ごころでやってます。」

「ははっ、あんな所でやってんのかよ」

...あんな所。

あきらかに下に見られている。

「.....や、でもみんな凄い人達ですよ。店も活気があるし」

「活気ってお前...この店みてもそんな事言えんのかよ。」

どうせ小さい店内で、チマチマやってんだろ」

鼻で笑いながらそう言って、たばこに火をつける先輩。

この人にとっては喧嘩を売っているつもりはないんだろうが、
テーブルの空気は明らかに変わっていた。

シゲキを見ると、先輩をジッと睨んでいる。

「で、何しに来たのお前？もしかして偵察？」

「.....」

「お前、そんなんだから売れねえんだよ。
何なら俺がその店行ってやろうか？No.1になるかも知れんぞ」

「私が連れてきたの。この子たちにこの店を見せたくて」

先輩にそう言った後、
トモミさんは、俺とシゲキの眼を見た。

(...駄目よ、我慢なさい。)

トモミさんの眼はそう言っていた。

それからすぐ、先輩は指名が入ったようだった。

「じゃあ、またな」

そう言って、指名された席に向かう。

「何かすいません...あの人あぁなんですよ」

先輩が席を立った後、後に残ったホストがフォローした。

「よく我慢したわね。気にしない事よ」

トモミさんもそう言ってなだめる。

俺とシゲキは釈然としないまま、グラスを口に運んでいた。

愛に居るのはあんな人ばかりじゃない。

それはもちろん、わかっている。

だがこのことが切っ掛けで、俺のホストとしての目標がまたひとつ出来た。

打倒、愛。

いつか愛を超えてやる。

そう思った。

しばらく飲んでいると、ある一角がザワザワと騒がしくなった。

「雄一君見て、愛田社長よ」

愛田社長...

愛田観光の社長で、愛本店を作った張本人だ。

名前しか聞いた事のない、歌舞伎町の超有名人。

トモミさんに言われて振り返った俺のすぐ脇を、その愛田社長が通り抜けて行く。

これが、愛田武.....

俺は、そのオーラに気圧されてしまった。

圧倒的なカリスマ性。その風格は、見る人の目を釘付けにさせた。

歌舞伎町のホストにとって、神様のような人。

俺は、その姿を目で追うだけで精一杯だった。

...打倒、愛。

それは、この人に勝たなきゃいけないという事だ。

先ほど立てた自分の目標が、一気に大きくなって、
手の届かない所に行ってしまうそうだった。

屈辱の日々

伝説のホストクラブ”愛”に行き、圧倒された俺とシゲキ。

「どう？収穫はあった？」

花ごころに戻ってきた俺たち3人。
俺はまだ、先ほどの光景が目に焼き付いていた。

煌びやかな店内、大勢のホスト、口の悪い先輩、そして愛田社長...
花ごころには無い物ばかりだった。

「想像以上でした。あんなに規模が違うなんて」

「そうね、確かに愛は凄いホストクラブだわ。
愛田社長の圧倒的な力で、
開店から今までずっと日本一をキープしているからね」

「でもね...」

トモミさんは続ける。

「私は花ごころの方が好きよ。」

「...どうしてですか？
向こうの方が規模も大きくて、それに売れているのに」

「その理由は...きっとそのうちわかるわ」

そう言って、トモミさんは笑顔を見せた。

それから数日経ち、いつものように二人で皿洗いをしながら、シゲキと話していた。

「なあシゲちゃん、この前トモミさんが言った事覚えてるか？
ホストの顔を作れって事」

「ああ、もちろん覚えてますよ」

「あれからずっと考えてんだけどよ、中々決まらないんだよな」

「俺、何となくだけど決まりましたよ、ホストの顔」

「本当か？どうすんの？」

「出来るかわかりませんが...俺は、クールな感じで行こうと思います」

「なるほど、確かにシゲちゃんそう言うの似合いそうだな」

「雄一さん、悩んでるんですか？」

「うーん、そうなんだよな」

...この間の一件から、ずっと考えてはいた。

ヤンキーの過去を活かして、ユウキみたいにイケイケで攻めるか？

キョウヘイちゃんみたいに、盛り上げ役として引っ張っていくか？

アツヒコ君みたいに、貶して上げる作戦で行くか？

しかし、どれもイメージがつかない。

...俺は、どういうホストになればいいんだろう？

そう自問自答しながら、数日が過ぎて行った。

相変わらず、泊まる所と言ったら、花ごころの人の家か友人宅。

一度店を出たら、食う物も満足に食えない日々が続いていた。

ずっと人の家をローテーションするわけにもいかず、
泊まる家が無い時は、近くのサウナに泊まっていた。

フィンランドと言う名前のそのサウナは、店からほど近い事もあり、
その後ちゃんと泊まる場所が出来てからも、しばらく愛用する事になる。

24時間空いているサウナ。

終電を逃した人や、俺の様な宿の無い人間が安上がりで利用できる事もあり、

脱衣所は混沌としていた。

酔いつぶれて寝るサラリーマン、

浮浪者とおぼしき草臥れた老人、

わけあり顔の少年、

俺らのような水商売の人々...

その光景はさながら...華やかな歌舞伎町の、ドロドロとした内臓のような、町の汚れた中身を連想させた。

サウナから漏れる、むっとした熱気の脱衣所で、一夜を明かす人達。

俺も、よくそこのベンチに寝転がって夜を明かした。

雑踏から漏れる、男たちの話声に耳を澄ますと...

どの店のキャバ嬢がどうだったとか、

いい儲け話だとか、

犯罪絡みのヤバい話などが聞こえてくる。

...本当にここは、欲望の町だな。

その片隅で、まどろみながらそんな声に耳を澄ますのが、実は少し好きだった。

今の俺の居場所はここなんだ。俺の町なんだ。

そんな事を良く考えていた。

フィンランドと言えば、洒落にならないエピソードも結構ある。

その中の一つに、同性愛者からのセクハラがあった。

知っている人も多いと思うが、歌舞伎町1丁目はホストクラブやキャバクラのメッカだが、新宿2丁目といえば、世界最大級のゲイ・タウンとして有名だ。

当然、サウナなんかは、所謂発展場として使われる事も多かった。

今はどうだか知らないが、フィンランドも当時多くの同性愛者が利用していた。

同性愛者の中には、ノンケと言われるノーマルな一般人に手を出す人もいて、顔のいいホストなどは、よくその餌食になっていた。

そんなフィンランドを、花ごころのメンバー ユウキが利用した時の話。

いつものように夜を明かそうとユウキが脱衣所のベンチに横たわって寝ていた。

しばらく寝て、ふと目が覚めると、いつの間にか何やら顔についている。

頬を手で拭ってそれを見る。

白くて粘着質で、異臭を放つそれは、なんと他人の精液だった。

あろうことか、寝ているユウキにぶっかけた奴がいるのだ。

気付かれなかったから良かった（？）ものの、
もしユウキに見つかっていたら、そいつはタダじゃすまなかつたらう。

なんせ花ごころの特攻隊長だからな。

そして、俺もその頃似たような体験をした。

同じように横たわって寝ていて、ふと目を覚ますと、目の前にオヤジが立っていた。

立って、こちらの方を向いて……いきりたつ自分のモノを、懸命に扱っていたのだ。

俺が目覚めた事に気づいたオヤジは急いで逃げた為捕まえられなかったが、
その事に恐怖と怒りを覚えた。

ホストでも上手く行っていないのに、そんな事もあって気が滅入ってしまった。

さらに、店でヘルプについても、客からはなじられる日々。

「こっちは、サラリーマンと話しに来たんじゃないんだよ！」

「あんたの話面白くないから、他の人呼んで！」

「ホストなら客を楽しませるのが仕事でしょ？
そんなんで楽しませられると思ってんの！？」

そんな事を、毎晩言われた。

当時、未成年でも当たり前前にホストで働いていた時代。

実際、俺の23歳と言う年齢は、新人と呼ぶには歳をとり過ぎていた。

屈辱と、自分の矮小さに、苛立っていた日々。

打倒、愛 という大それた目標を掲げた自分と、現実のかい離に、俺は打ちのめされそうになっていた。

頼られるホスト

仙台から歌舞伎町に戻り、花ごころのドアをくぐってから早4か月。

相変わらず指名は一件もなく、同期のシゲキと共に、当然のように順位は最下位。

打倒愛と言う目標と、現実の乖離に苛まれる日々が続いていた。

自分はどんなホストになるべきか.....？

その答えも見い出せないまま過ごしていた頃...ある事件が起きる。

所で、ホストクラブには、いくつかの指名の方法がある。

俺がまだ一件も取れていない”本指名”の他に、
途中で店内のホストを呼ぶ”場内指名”、
帰り際に送ってもらうホストを指名する”送り指名”などだ。

本指名、場内指名、送り指名の順に料金が安くなっていき、
送り指名の指名なんてその頃ほとんど無いに等しかった。

俺もヘルプには良くついていて、
有難い事に、トモミさんやたまに朱里からも送り指名はもらっていた。

そしてこの頃もう一人、たまに送り指名をもらっていたのが、

ユウキの客である、レイと言う女の子だ。

実はこのレイと言う子は、スウィートヘブンで働いていたキャバ嬢だった。
例の一件以来、花ごころにお客さんとして来てくれている子の一人だ。

事件は、このレイに送り指名をもらった時に起こった。

「送り指名、雄一さんでお願いします！」

その日は、ユウキのヘルプでレイの席に付いていた。

送り指名すらもほとんどなかった俺は、張り切ってレイを送った。

「じゃあ、また来てね」

花ごころの前まで来て、レイを見送る。

...とその時、店の前をギリギリの距離で一台の車が通りかかった。

「危ない！」

帰ろうとして振り返るレイの手首を掴んで、引き寄せる。

その横を、減速も無く通り過ぎる、黒塗りのベンツ。

「危ねえな、大丈夫だった？」

「うん、もうちょっとで当たる所だった...雄一さん有難う！」

何とかレイに当たるのを防ぐことができたが、
一歩間違えれば大変な事になっていた。

そしてそれから数日経った雨の日、再度俺はレイから送り指名をもらう事が出来た。

「今日も雄一さん。お願いします！」

視界が悪い中、傘を持ってレイを見送る俺。

そこに、前回と同じ車がまたギリギリの所で向かって来た。

「あっ！」

それに気づくのが一瞬遅れてしまった。

ガッ！！

「キャッ！！」

身体には当たらなかったものの、
ミラーがレイのバッグに当たった。

次の瞬間、俺は傘をほっぴり出していた。

そして、道の脇に置いてあったカラーコーンを掴むと、黒塗りのベンツに向かってブン投げた。

「待てコラァ！！」

ガンッ！カラーコーンがベンツにあたる。

車が一瞬止まり、こっちに向かってバックして来て店の前で止まった。

車から、一人の男が出てくる。

予想はしていたが、出てきた男はヤクザだった。

「あ！？」

傘も差さずに男が近づいてくる

「あ？じゃねーんだよ、テメエどういう運転してんだよ！！」

「あ？.....知るかボケエエ！！！」

男が声を張り上げる。

「ドコのモンかわかってケンカ売ってんのかよ、あ!？」

「ドコのヤクザだろうがカンケーねえんだよ! 謝れや！」

「雄一さん、もういいよお! 大丈夫だから...！」

レイが俺をなだめようとするが、
俺は完全に頭に血が上っていた。

互いの顔の距離が30cmぐらいの所で、傘も差さずに罵りあう。

「ぶっ殺すぞテメエ！」

「上等だよやってみろや!!」

いつの間にか、周りには人だかりが出来ていた。

大通りからは少し離れているとは言え、夜の歌舞伎町。

大声で喧嘩をしているのがかなり目立ったようだ。

5分ぐらい罵り合った時、ヤクザが俺の肩をドンと押した。
半歩後ずさって、その反動で拳を握り、俺は男に殴りかかった。

...が、殴れなかった。

手首を後ろから掴まれたのだ。

振り返ると、そこにはカツヤ君が居た。

店内から騒ぎを聞きつけたのだろう。

「何があった、雄一」

「カツヤ君...」

俺は、興奮冷めやらぬまま、事の顛末を話した。

話を聞いたカツヤ君は一言、

「そうか」

と言って、ヤクザの男の方に歩いて行く。

きっとカツヤ君もこの男を許さないに違いない。スウィートヘブンの時のように。

そう思ったが、カツヤ君の行動は想像と全く違ったものだった。

「俺はここの責任者をやってるものです。

この度はうちのモンが迷惑かけました。

よく言い聞かせておくから、俺の顔に免じてここはおさめて欲しい。」

そう言って、男に頭を下げたのだ。

予想外のカツヤ君の行動に、俺は面食らっていた。

男も、一瞬戸惑った様子を見せたが、
頭を下げるカツヤ君の奥に立っている俺を睨みつけると、
側にあったゴミ箱を派手に蹴とぼしながら車に戻って行き、消えて行った。

レイにもお詫びを言って帰した後、
花ごころの店内で俺とカツヤ君は話していた。

「カツヤ君...何で謝ったんすか？」

「.....」

「まさか、相手がヤクザだからですか？」

「.....雄一よお、じゃあ聞くんが、
お前俺が止めなかったらどうしていた？」

「.....喧嘩になっていたと思います」

「...お前は昔っから変わってねえな」

「...カツヤ君は変わってしまったんですか？」

カツヤ君は煙草をふかしながらゆっくりと言った。

「いいか、ヤクザだとかは関係ねえ。
俺らは今、なんだ？チンピラじゃねえ、ホストだ。」

「けど、レイにぶつかりそうになって...」

「実際にぶつかって怪我でもしたのか？」

「...カバンだけですけど.....」

「そんな事で毎回喧嘩するつもりか？」

「.....」

「...いいか、雄一。俺らは喧嘩で商売してんじゃねえ。
ホストで商売してんだ。
喧嘩して男を売りたいのか？違うだろ。
そんなんだったら、ヤクザにでもなってるよ。」

「ホストで売りたいなら、客を第一に考えろ。
このままじゃお前、一生下っ端のままだぞ。」

「.....」

言い返せなかった。

俺は、男を売りたいかった。

喧嘩で男を売る事は簡単だ。

でも、今俺はホストをやっている。
ホストで顔を売らなきゃ、何の意味も無い。

「...すみません」

カツヤ君は、ため息をつく俺の肩を叩き店内に戻って行った。

俺も店内に戻り、溜まっている皿を洗い始める。

しばらくすると、シゲキが俺を呼ぶ声が聞こえた。

「雄一さん、電話が入っています」

電話は、レイだった。

「雄一さん、今日は大変だったね。ありがとう」

「いや、こっちこそごめんな。
結局レイも雨に濡れてしまって、相手も謝らなかったし...」

「ううん、カツヤさんの行動は正しかったと思う。
確かに危なかったけど、私の事であのまま喧嘩にはなって欲しくなかったから。
喧嘩になってたら、私責任を感じてしまってたと思う」

「レイ...」

そのまま自分の感情に任せて喧嘩していたら、レイにも迷惑を掛ける事にもなったのだ。

”客を第一に考えろ”

カツヤ君の言葉が響いた。

「.....ごめんな」

「あ、違うの、ごめんなさい。
確かに喧嘩にはなって欲しくなかったけど。
私、お礼を言いたくて電話したの」

「お礼？」

「.....雄一さん、頼りになる人だね！ありがとう！」

その言葉で、俺の中の何かが弾けた。

”頼りになる人”そのフレーズが自分の中で何度も反復した。

暴走族の総長だった時、皆から頼りにされていた。

仙台で後輩たちを何人も養っていた時、皆から頼りにされていた。

俺は今まで、頼りにされる事に生きがいを感じていた。

そうやって生きてきた。

.....頼られる、ホスト。

皆から頼られる、器の大きいホスト。

そうだ、俺はそんなホストになろう。

ホストとしての自分の生き方が決まった瞬間だった。

女の争い

"皆から頼られるホストになる"

結果として、この信念が後にホスト協会の会長にまで繋がる事になるのだが、それはまだ後の話。

この時点ではパツとしない、
新人...と言うには少し歳をくっている、只の売れないホストだ。

「雄一さん、何か良い事あったんすか？」

花ごころの店内でユウキが話しかけてきた。

「いや、別に良い事って 訳じゃないけどな」

何となく、これから俺がどうすればいいか、道筋が分かった。
その事が表情に出てたんだろう。

「あ、そういえば雄一さん。
前、地元に行ったブラックローズってレディース覚えてますか？」

「あー、あったな。そんなレディース。
確か極勇会とも結構交流あったよな？」

ブラックローズ...

以前、俺が暴走族の総長をやっていた頃にも、
極勇会を立ち上げた時にも交流があったレディースだ。

「そうです。その子ら、今池袋でキャバ嬢やってんですけど、
雄一さんの話したら是非店に来てほしいって。
今度行きましょうよ」

この頃、ホストにヤンキー上りが多かったように、
キャバクラにもヤンキー上りの子が沢山いた。

今でこそ普通の女の子も当たり前水商売をやっているが、
その当時は、ヤンキーであった事がのイケていたと言う価値観の時代。

目立つ子や派手な子は、みんなヤンキーになりたがり、
その流れで水商売にもなっていた。

「そうか、じゃあ近々行ってみるか」

「はい、行きましょう！」

(金、厳しいのにな.....)

内心そんな事を考えていると、声がかかる。

「雄一さん、ヘルプつきますか？」

カズキさんだ。

カズキさんは、花ごころの”店長”だ。

オーナーにカツヤ君とワタル君が居て、
その下に店長のカズキさんが居た。

俺より年下だった為、お互い”さん付け”で呼び合っている。

俺が花ごころに入った日もカズキさんは居たが、
スウィートヘブンの事件の時はたまたま休みで、事件にかかわる事は無かった。

「俺も行きたかったな...」

事件を知ったカズキさんは、笑いながらそう言っていた。

「あ、はい。大丈夫です！」

カズキさんの指名客は、ユカという子だった。

ユカは、当時タレントをしていた。

ミニスカートでポリスの格好をして、テレビにも良くでていた。
(ちなみに、名前は変えてあるからユカで調べてもでないぜ)

このユカ.....実はあの蘭丸と、
カズキさんを巡って花ごころで壮絶なライバル関係にあった。

蘭丸は、俺に初日にハイヒールでビールを飲ませたほどの強者で、
そんな蘭丸とライバルであるユカも相当なのかと思うかもしれないが、
ユカは本当に性格の良い子で、俺は良く癒されていた。

芸能界で頑張っていくためには相当な苦勞が必要なようで、
ある時は、一週間味噌汁だけで過ごしているなんて話も聞いた。

そんな苦勞話がよく似合うほど、健気な子だった。

しかし、ユカはそんなもストレスを俺たちホストにぶつける事も無く、
カズキさん以外にも優しく接してくれていた。

そんなユカの席にヘルプについて、
減ったグラスに酒を注いだり、
煙草に火を付けたら、
テーブルの上を片付けたら、
絶え間なく色々補佐をする俺。

メインでカズキさんがユカと話している時、
俺は基本的に話に割って入る事は無い。

ひたすら、指名ホストの補佐をするのがヘルプの役目だ。
いわば雑用とも言える。

しかし、ユカはそんな俺にも笑顔で話しかけてきてくれた。

(.....全く、蘭丸とは正反対だな)

そう思っていると、突然、ユカの顔が一瞬険しくなった。

店の入り口を、凝視している。

.....？

ユカの視線を追って見ると、俺にとっても好ましくない存在がそこにいた。

蘭丸が来店して来たのだ。

カズキさんを見ると、

あちゃー！

そんな顔をしていた。

ユカと蘭丸の争いは、花ごころの皆知っていた。

実をいうと、俺のホスト初日、
蘭丸のお目当てのホストが接客中だったから俺が蘭丸の席に付いたのだが、
そのお目当てのホストはカズキさんで、
その時もカズキさんはユカの接客をしていたのだ。

だから、あそこまで機嫌が悪かったのかもしれない。

つまり、今はその時と同じ状況だ。

ユカに目を戻すと...流石芸能人、
既に何事も無かったかのように、カズキさんに笑顔で話しかけている。

”こっち”はとりあえず大丈夫か...

とは言え、見ての通りカズキさんは接客中だ。

誰かが、カズキさんの”繋ぎ”をしなくちゃいけない。

.....一体、誰が...

その時、俺の背後から声がかかった。

「雄一」

.....俺はその瞬間、全てを悟った。そして覚悟を決めた。

俺は再び、蘭丸の席に付く事になった。

蘭丸と言う女

「い、いらっしやい。……お久しぶり」

「……」

やはり、不機嫌極まりない。

さっきから刺すような視線を、カズキさんとユカのテーブルに向けている。

「…とりあえず、乾杯！」

「……」

グラスすら持ってくれない…。

テーブルに置かれた蘭丸のグラスに、俺のグラスをカツンとぶつけ、その音が虚しく響いた。

「……何話してたの？」

「え？」

「さっきあそこの席に居たでしょ。どんな話してたの」

「あ、ああ。いや、普通に芸能界の話とか…」

言い終わるやいなや、グラスに手を掛けて飲み干す蘭丸。

一気だ。

ゴク...ゴク.....ドンッ

「...何が芸能界よ」

(うわー.....逆効果だったか)

その後、何とか蘭丸の機嫌を損ねないようにしのぐ俺。

結局、カズキさんが蘭丸の席に付けたのはそれから1時間以上経った頃だったが、何とかカズキさんが来るまで繋ぐことが出来た。

...すこし接客に慣れてきたのかもしれない。

そう思った。

これでやっと蘭丸の籍から解放される。

安堵して、席を立とうとする俺に、蘭丸が話しかけてきた。

「ちょっと」

「な、なに？」

「.....」

「.....」

「.....こないだは悪かったわね」

「.....!い、いや。大丈夫...」

およそ蘭丸らしくない態度を見て、少し面食らってしまった。

そして去り際に見せた、蘭丸の、少し憂いを帯びた目が妙に気になった。

一数日後。

俺は、新宿駅で電車を待っていた。

(快速が来るのはもうしばらく先だな...)

ホームのベンチに腰かけて電車が来るまで暇をつぶしていると、

階段の方から見覚えのある人物がこちらに向かって歩いてくる。

「げ...」

それは蘭丸だった。

ハイヒールをカツカツと鳴らしながら、こちらに向かってきている。

知らない人が見たら、思わず振り返ってしまうのかもしれない。
タイトな服で露出も多い格好をしていた蘭丸は、いい意味で目立っていた。

「あっ...」

俺との距離が2、3メートルになった付近で、
蘭丸もこちらの存在に気付いて小さくそう漏らした。

バツの悪そうな顔をして、足を止める蘭丸。

(こっちだって会いたくなかったよ...)

「...こんにちは。偶然ね」

「あ、ああ。こんにちは」

「.....」

「.....」

気まずい。

基本的に酔っている蘭丸しか見たことない為、
何を話せばいいかわからない。

「今日は、休み？」

考えた結果の言葉がこれだった。
蘭丸が何の仕事をしていたか別に知っていた訳じゃない。

「……いや、仕事よ」

ぶっきらぼうにそう言うと、蘭丸はバッグから煙草を取り出した。

「ここ、いい？」

そう言って、俺の座っている席から一つ分けて座る。

今のように喫煙スペースが明確に分離されていない時代、
そのまま煙草に火をつけて吸い始める。

「……」

「……………」

空気に耐え切れず、俺も自分の煙草に火をつける。

と、ふとある事に気づく。

.....殴られた後？

蘭丸の顔には、殴られたような跡があった。

「ああ、...これ？」

俺の視線に気づいた蘭丸が話し始める。

「.....客に殴られたの」

視線は真っ直ぐに向けたまま、そう呟く。

「殴られた...」

「そう、風俗の客にね」

.....風俗。

風俗で働いていて、その稼ぎでホストクラブに来る客は珍しくない。

基本的に客のプライベートを詮索するのはご法度だが、話の流れで職業を聞いてしまうような事はあった。

「……」

「あたし風俗で働いてんの、しかも掛け持ち。……軽蔑した？」

「…いや、しないよ。
……ホストやってる俺も、同じようなもんかも知れないし」

「…綺麗ごとと言わないでよ。同じな訳ないじゃない」

「……」

顔は相変わらず正面を向いたままだったが、
その時、蘭丸の目から一粒の涙がこぼれた。

「…！」

「あたしだって、好きでやってる訳じゃ…」

か細い声で、消え入るようにそう漏らす蘭丸は、
花ごころで見た時とは別の顔をしていた。

「……事情があるのか？」

「…金の為よ」

「………親の借金」

「そうか...」

今でこそありがちなパターンとして話されるが、
本当に当時は、家庭の事情で風俗に行く子も多かった。

今以上に、風俗に勤めている事を恥だと考えられていた時代。

しばらく沈黙があったが、次第に蘭丸は自分の境遇をぽつぽつと話し始めた。
今思えば、誰かに聞いて欲しかったのかもしれない。

俺は黙って蘭丸の話聞いていた。

「毎日毎日、何人もの、汚い男の性欲の処理をしてさ...
相手はあたしなんか女と思ってない、いや人間とも思ってない」

「物のように扱われて、用が終わったらゴミみたいに扱われて...」

「...出した後の男の眼ほど、冷たいもんはないよ...」

「.....」

「そんな毎日に頭がおかしくなって、自殺した子もいる。
あたしは.....カズキさんと飲むことで耐えてきた」

ホストクラブに女性が来るのは、
日頃のストレスから解放されたがっているからと言う理由も多い。
非現実的な空間で、日常の鬱憤を忘れて楽しんでいるのだ。

ホストクラブの客に風俗やキャバクラの子が多いのも、
金銭的な問題だけじゃなく、普段から男の欲望に晒されていて、
そこで溜まった負の感情やストレスを発散しに来ているのだろう。

「妹を高校に行かせてるのもあたしの稼ぎからなんだ...」

「なのに.....」

そう言って言葉を詰まらせる蘭丸。

長い時間吸わなくなって長く伸びた煙草の灰が、蘭丸の手元から地面に落ちた。

「病院に行ったら、性病だつてさ。
あたし移されたみたい.....それが原因で、殴られて」

もう一度、涙をこぼす。
小さく肩を震わせる蘭丸は、とてもか細い存在に見えた。

どんな病気なのかは分からない。

しかし、蘭丸の様子を見ていると、
これからも店を続けて行くには難しいくらいの病気なのかも知れないと思った。

蘭丸は、ほとんど吸う事が無いまま短くなってしまった煙草を灰皿に入れると、
次の新しい煙草を取り出した。

と、次の瞬間、

俺は無意識のうちに手に持っていたライターで蘭丸の煙草に火をつけていた。

一瞬びっくりして目を丸くした蘭丸だったが、
煙草に火が点くと口から煙草を離して笑い始めた。

「ははっ、あんた、店の外でもホストなんだね」

目には涙を浮かべ、泣き笑いのような表情で蘭丸はそう言った。

俺は、無意識の自分の行動に驚いていた。
女性が煙草を取り出すと火を持っていく事がどうやら習慣になっていたようだ。

「...何か不思議な男だね、あんたって」

「黙って話を聞いてくれそうな雰囲気があるよ。
こんな自分の境遇なんて、誰にも話したこと無かったのに」

「...今まで色々な男と会って来たけど、
あんたみたいな奴は居なかったな.....」

確かに、別に蘭丸が風俗で働こうが、性病だろうが、
俺は特に何とも思わない。

そんな空気を蘭丸は読み取ったんだろうか。

「...最初会った時、ひどいことしてごめんね」

「いや、もういいよ。それよりこれから...」

これからどうするのか。

その言葉を遮るように蘭丸は立ち上がった。

「さ、もう行こうかな電車そろそろ来そうだし」

「...ああ、そうだな」

「.....」

「.....」

「あたしさ、しばらく店に来ないと思うからカズキさんによろしく言っておいて」

「わかった、伝えておく」

これからどうするのかという質問を遮った事、

そしてしばらく店に来ないという言葉で、何となく蘭丸の今後の想像できた。

「しばらく来ないけど.....次来た時は、あんたを指名しようかな。

その時は宜しく。じゃあね」

そう言って、蘭丸は歩き出した。
ホームの人ごみに紛れ、街の一部となって消えていった。

残された俺は、しばらく考えていた。

蘭丸の言葉、そしてホストクラブとは何か。

蘭丸のような客は、きっとホストクラブに救いを求めていたんだろう。

心が千切れそうな生活の中、
何とか今日と明日を繋ぎとめたかったのかも知れない。

俺たちホストは、客に精一杯の奉仕をする事で、
そんな彼女たちをまた一日頑張れるようにする。

...それが、ホストの使命なのかもしれない。

ようやくホームに到着した快速が、
俺には人々のストレスを詰め込んで走る機械に見えた。

失敗

最悪の印象だった蘭丸の、意外な一面を見てしまったから数日。

俺はまだその事について考えていた。

人はそれぞれの社会でそれぞれの顔を持っている。

俺自身も、”ホストの顔”を作ろうとしていたように。

”ホストに来る客は、みんな何らかのストレスがあり、癒されたくて来店している”
だからホストは、客のストレスを解消する義務がある...

決して全て間違っている訳ではない。

しかしこの時の俺は、その考えに固執してしまっていた。

それほど蘭丸の告白が俺には衝撃的だったのだ。

そんな中、いつものように花ごころでヘルプをしていた俺は、
ある客を担当する事になった。

—その客は、少し陰があるように見えた。

指名無しの本番（新規客）だったため、
No.1のキョウヘイちゃんが席に付く事になった。

俺も、キョウヘイちゃんのヘルプとして同じ席に付く。

キョウヘイちゃんはいつもの調子で、ハイテンションで手を抜かない。

「そのブランド、エルメスじゃない？お洒落だねー、可愛い！」

「この前面白い事があってさー...ってなっちゃったんだよね！」

しかし、いくら話しかけても、その客は、

「そう」

「うん」

「そうなんだ？」

と、そっけない反応。

キョウヘイちゃんいくら盛り上げようとしても、暖簾に腕押しだった。

キョウヘイちゃんも、客の好みを探ろうと色々と話題の方向性を変えて頑張るが、中々その客のツボに合った話題を提供出来ないでいるようだった。

(さては...これは、蘭丸と同じパターンの客だな...！)

(そう言う客には、こちらから話すんじゃなくて、向こうの話を聞いてやらなきゃいけないんだよな。)

キョウヘイちゃんより早くその事に気づいた事が嬉しく、俺はヘルプをしながら内心少し調子に乗っていた。

(キョウヘイちゃんも頑張ってるけど、そのやり方じゃ駄目なんだよな。)

(俺に替わってくれれば、ちゃんと話を聞いてやるのに。)

一向に嘸みあわないテーブルの2人を前に、俺はやきもきしていた。

と、その時。

キョウヘイちゃんに指名が入った。

「と、ごめん！指名入っちゃった。また会おうね！」

グラスをカツンと合わせ、キョウヘイちゃんが席を立つ。

(よし...！俺の番が来た！)

キョウヘイちゃんに出来なかった事を俺がやれば、みんな俺を一目置くに違いない。
そう意気込んでいた。

よし、行くぞ。

「どうしたの？さっきから元気ないね！」

「...別に普通だよ」

「いやいや、そんな事無いでしょ。
.....何か色々ストレスでも溜まってんじゃない？」

「別に溜まってない」

ありや...

”何でわかるの！？”

なんて台詞を言われる事を期待していたが、中々一筋縄では行かないようだ。

(こう言う子は、心に壁を作ってしまったている。
色々探って情報を聞き出さなきゃな)

何より、早くしないと次のホストが来てしまう。

まだ一件も指名が無い俺は、
二人きりで話せるチャンスを活かさないといつまでも無指名のままだ。

俺は、頼りになるホストになる。

その為には、色んな客の悩みを解決しないとイケない。

俺は、その時無理にでもそうしなければならないような強迫観念に捉われていた。

「何か悩みがあったら聞くよ！」

「いや、別に無いって言ってるでしょ」

「じゃあ何でそんな暗い顔してるの？」

「もともとこんな顔よ、失礼ね」

...うーん、中々悩みを言わないな。

聞き方がまずかったんだろうか？

もしかしたら、強引に攻めた方がいいタイプの客なのかもしれない。

ここは、アツヒコ君の接客を真似して攻めてみようか。

「せっかくホストに来てんのに、そんなしけたツラするなよ！」

「嫌な事忘れてもっと盛り上がって行こうぜ」

「.....」

「あ、わかった！男でしょ。絶対そうだ！」

「いかにも男好きそうな顔してるもんな！」

そう言った次の瞬間、
俺はグラスの酒を頭からかけられていた。

そして、続けざまに客から思いつきりビンタをくらった。

『っざけんじゃねーよ！！
さっきから聞いてりゃ、何様のつもりだよ！！！！』

店内に響き渡る声に呆然とする俺。

店内の視線が一気に集まる。

「ちょっと！責任者呼んで！！何だよこのホスト！」

...やってしまった。

前髪から滴る酒の雫と、その奥で喚く客の声が遠くに聞こえ、
現実ではないような感覚になっていた。

すぐにワタル君が駆けつけ、客の話を聞く。

「こんな失礼なホスト雇ってんじゃねーよ！」

「金返せよ！！」

そんな単語が飛び交う。

「取りあえず、お客さんに謝って！」

ワタル君にそう促され、俺は頭を下げた。

「後はいいから、バックヤードに行って」

返事もしないままバックヤードにトボトボと向かう俺。

後ろからは、

「何で金払ってまで嫌な思いをしなきゃならないんだよ！」

そんな声が聞こえていた。

数分後、とりあず騒ぎは収まり、客は怒りながらも帰って行った。

しかし、俺はまだ動揺していた。

なんて事をしてしまったんだ。

自分の思い込みで、客を怒らせてしまった。

”こんなホスト雇ってんじゃねーよ”...か。

「ホスト失格だな...」

道筋が見えた途端、ぷつぷつと断ち切られてしまったように感じた。

俺の方向性は、間違っていたのか？

これから、どうやって客に接して行けばいいんだ。

わからなくなってしまった。

そしてこの日、もう一つの事件が起きる。

俺の2週間後に入ってきて、俺と同じく指名ゼロの最下位だったシゲキ。

そのシゲキに、その日初めて指名がついた。

これで、花ごころで一度も指名をもらってないのは、俺だけになってしまった。

.....俺はこれから、ホストをやっていけるのか？

そして次の日、俺は初めて店を無断欠勤した。

ホストを初めてから半年経った頃だった。

初指名

花ごころを無断欠勤した事実。

それは、俺がホストの道を挫折した事を意味していた。

...一体俺はこれから、どうすればいいんだろう。

俺は、自分が良いと思うやり方を客にぶつけてみた。
しかし、その事は結果的に客を不快にさせただけだった。

だからと言って、何も工夫をしないでこのままだと、
いつまで経っても指名がもらえる気がしない。

俺より年下で後輩のシゲキが、昨日初指名をもらった。

俺よりも年下が多い花ごころのメンバーの中で、
ずっと最下位でこのままやっ行って行かなければならないんだろうか。

一つ悪い方向を考えると、次々とネガティブな考えが押し寄せてくる。

皆は内心、俺を見下してるんだろうな...

このまま一番下っ端のままで、どんどん歳をとって行くんだろうか...

カツヤ君には給料泥棒って思われてんだろうな...

そもそも、呼んでくれたカツヤ君の顔を潰してしまってるよな...

俺が居なくても、当たり前のように花ごころは営業できるんだろう...

「...俺がホストをしている意味ってあるのか...？」

そんな事を考えながら、さっきスーパーから買ってきた、賞味期限間近の割引された菓子パンを頬張る。

いつの間にか俺は泣いていた。

必死にこらえようとしても、嗚咽は止まらず、菓子パンを口に入れたまましばらく泣いていた。

うぐっ...くっ.....ぐっ.....！

涙が口に入り、塩の味がする。

...誰がこんなみじめな俺を想像するだろうか。

仙台に居た頃の、自信たっぷりの俺からはとても想像出来ないこんな俺を。

.....仙台、か。

仙台に帰ったら、世話をしていた後輩たちも居る。

きっと歓迎してくれるだろう。

仕事も、仙台で何か探せばなんとかなるかも知れない。
少なくとも、こんなみじめな気持ちでいる事はなくなるだろう。

金だってそうだ。
こんな、毎日満身に食べる事もままならない生活がいつまで続くのかわからない。
泊まる所だって、知人の家を転々と移動している根なし草の様な日々。

客からはいびられ、文句を言われ、愚痴を聞かされ、
新人いびりで無理矢理酒を飲まされる毎日。

店での順位は最下位で、
勤めて半年で未だに一件の指名も取れていない店のお荷物。

一旗あげてやろうと躍起になっていた最初の頃のあの情熱は、
今にも消えてしまいそうな風前の灯になっていた。

「仙台に帰る.....そんな選択肢も、あるのかもしれないな」

これは、今思えば逃避以外の何者でもなかった。
とにかく、このみじめな気持ちから逃げたかった。

慕ってくれる後輩と過ごす、また自信を取り戻せるかも知れない。

そうだ、仙台には残してきた何人もの彼女もいたじゃないか。

今の、全く女っ気の無い生活もまた抜け出せるな。

マイ、美優、サチコ.....

あ、美優は駄目だった...あんなこともあったしな。

そんな事を考えていると、携帯に一本の着信が入った。

ピリリリリリリ...ピリリリリリリ...

ちなみに、これは1990年前半の話。

携帯を持っている人はまだ多くなく、
俺も花ごころに勤めるようになってから携帯を持ち出した。

今では見ない、セルラーの携帯電話だ。

(店からだろうか...)

無断欠勤した訳を説明しようと構えてから電話に出たのだが、相手の声を聴いた瞬間、俺は耳を疑った。

「もしもしユウくん？マイだけど！」

マイ...！！

何と言う偶然、たった今思い出していた、仙台の元彼女だった。

「マイか！？何でこの番号を...？」

「良かった、繋がった！へへ、この番号、聡君に聞いたんだ」

聡...仙台に残してきた、俺が世話していた後輩だ。
そういえば後輩たちには電話番号を教えていたんだった。

「ちょっとユウ君の事を思い出してさ...声が聴きたくなっちゃって」

「元気にしてる...？ユウ君今ホストやってんだよね、どう調子は？」

「あ、ああ。...ボチボチだよ」

「ユウ君の事だから、もうガンガン稼いじゃってるんだろな～。
こっちでもモテモテだったもんね！」

ズキン、と心が締め付けられた。

「いいなー、私もユウ君に接客されたいな。
シャンパン入りまーす！とか言われてみたい」

「そうだな...」

「凄かったもんねー、こっちでのユウ君の人気。
女の子をとっかえひっかえしてさー、あははっ」

「いや...全然そんな事ないよ」

「またまたー！そんな事言って、店でも人気なんでしょ？
あ、もしかしてもうNo.1とかなってたり！？」

ズキン

「まだ半年だからさすがに無いかな？
でも上位には入ってそうだよな！」

ズキン

「.....もう止めてくれ」

「えっ？」

「...うるせえな、もう昔とは違うんだよ！！」

「...ど、どうしたの、ユウ君？」

マイの一言一言が胸に突き刺さった。
どうしようもない苛立ちが襲ってきて、つい声を荒げてしまった。

(お前は本当に俺なのか?)

(随分落ちぶれちゃったな!)

(ホストなんて楽勝って思ってたんじゃないのか?)

まるで過去の自分が、今のみじめな自分を笑いに來たように感じた。

「マイ...怒鳴ってごめんな、折角電話くれたのに悪い、
.....今はちょっと話す気分じゃねーんだ」

「え、え!?! どうしたの? 何があったの?」

「じゃあな……」

「待って！話を聞かせて、何でも相談に乗るよ！」

「！」

”何でも相談に乗るよ……”

その言葉は、俺がホストとして客に投げかけていた言葉だった。

そうか…俺は悩んでる人に対してこういう風に接してきたんだ。

マイも、今俺の悩みを聞こうとしてくれている。

俺は、マイの真剣な声に応えるように、
少しずつ自分の事を話始めた。

ホストの世界の事、

極貧の生活を続けている事、

客とのトラブルの事、

未だに一件の指名も取れていない事、

店では最下位のホストだという事。

マイは、時折相槌を打つくらいで、黙って俺の話を聞いていた。

「.....だから、昔の俺とは違うんだ」

「...そう、なんだ。...ごめんなさい、あたしそんな事知らないで色々言っちゃって」

「いや、マイは悪くない。こっちこそ苛立ちちゃって悪かった...」

「.....」

「.....」

しばらく、沈黙が続いた。

マイは、かける言葉を探しているようだった。

「ユウ君、あのね」

「さっきユウ君は、昔の自分とは違うって言ってたけど...
そんな事無いと思う。ユウ君昔のままだよ」

「...」

「確かに、環境や周りの状況は変わったかもしれないけど...
でも、ユウ君の性格や考え方は、昔のままだよ」

「マイ...」

「昔から、一つの事に真剣に取り組んで、結果を出してきたよね」

「私が知ってる中でも、ユウ君何回か挫けそうになった事あるよ。
でもそれでも頑張って、
最後にはその挫けそうになった事まで力に変えて成功してきたじゃない」

「ユウ君は絶対にここで終わる人じゃないよ。
いま挫けてしまったら、全てが台無しになるよ。
ここでの挫折を、一生引きずる事になる。」

「この挫けそうになっている今も、
きっとこの先の成功に必要な事なんだよ！」

最後の方は、マイは泣きながら話していた。

俺も、マイには悟られないようにしていたが、
自然に涙が零れていた。

「...マイ、有難うな」

少し、マイに勇気をもたらった。

もう少しだけ頑張ってみよう...そう思った。

「明日、また店に出てみる事にするよ」

「うん、うん...」

マイはまだ涙ぐんでいた。

俺はマイに感謝の言葉を告げ、電話を切った。

一翌日、花ごころ

「...おう。来たか...」

カツヤ君は無断欠勤の事を咎める事無く、そう言った。

「すみません、昨日俺...」

「謝らんでいい。その分しっかり働けよ」

カツヤ君も、俺が無断欠勤した理由がわかってたんだろう。
どこか普段よりも優しく感じた。

「ま、無断欠勤分はきちんと罰金しとくからな」

「はは...」

前言撤回。いつもとあんまり変わらないようだ。

遅刻や無断欠勤など、そう珍しくないホスト業界。
皆、何事も無かったように開店の準備をしている。

どころか、むしろ皆俺に同情的だった。

「雄一さん、俺このまま雄一さん飛ぶんじゃないかと思いましたよ...」

キョウヘイちゃんがそう言った。
飛ぶとは、そのまま辞めて居なくなる事だ。

一番気まずそうにしていたのは、シゲキだった。
あまり俺と言葉を交わすことなく、店内の掃除をしていた。

準備も終わり、花ごころが開店した。

開店から15分。

もう同じ過ちは繰り返さないようにしなければならない...
そう考えていた俺に、突然声がかかる。

「雄一さん、指名です！」

「...えっ！指名！？」

俺は耳を疑った。

あんなに待ち望んでいた初指名が、
こんなにあっさり来るとは思わなかった。

...一体、誰が？

頭に10個ぐらい疑問符を浮かべながらテーブルに向かうと、
今度は目を疑った。

そこに居たのは、マイだった。

これから

「マイ！！何で...」

「...へへ、来ちゃった！」

テーブルに腰かけ、満面の笑みを浮かべてマイはそう言った。

「もしかして、昨日電話した時から東京に...？」

「ううん、あの時は仙台だったよ。
...ちょっと東京に来たくなって、来ちゃった。あはは」

ちょっと東京に来たくなって来た...

本当はそんな理由じゃなく、
昨日の電話で俺が落ち込んでいるのを知って来てくれたのは明らかだった。

「いやー、それにしてもユウ君凄いね！
スーツをビシッと決めちゃってさ！格好いいよ！」

マイはそう言って、褒めてくれた。
”サラリーマンみたいなダサイスーツ”と、今まで客に散々馬鹿にされたスーツを。

俺は、堪えていないと涙が今にも零れ落ちそうになっていた。

「マイ、ありがとうな」

「え！？いやいや...たまたまだよ、たまたま店に寄っただけだから、あはは」

マイはそう言って誤魔化した。

誤魔化したり冗談を言った後に、あははと笑う癖は昔から変わらない。

「さ、今日は飲むぞ～、楽しませてよね！ホストさん♪」

「はは...了解、お客様！」

こうして、俺の初の指名接客は始まった。

「マイは今も居酒屋で働いてるのか？」

「うん、そうだよ。あたし今チーフになってるんだ」

「へえ、凄いな。頑張ってるじゃん」

「懐かしいよね。ユウくんがお客さんとして初めてうちの店に来た時...」

マイと付き合いきっかけになったのは、
マイが働いている居酒屋に俺が行った時に話しかけられたのが切っ掛けだ。

その日、居酒屋で、俺は後輩と一緒に飲んでいた。

「ああ、あの時マイが客に絡まれたんだよな」

「そうそう、たちの悪い客だったねー！」

俺らの隣の席の客...40~50代くらいの中年の3人客が、マイに絡んでいた。

注文を聞きに来るたびにセクハラまがいの事を言ったり、
マイに無理矢理酒を飲ませようとしていた。

「完全に来る店間違えてたよな」

「あたしもう本っ当に嫌で、誰か助けて！って思ってた所を...
ユウ君が助けてくれたんだよね」

「はは、そんな事もあったな」

マイの嫌がる姿をそいつらは面白がり、
その客の行動は次第にエスカレートして行った。

俺も気になってはいたんだが、とうとうその客の一人が、

マイの胸を触り、マイがキャッと声を上げたところで我慢できなくなった。

「俺が手元の灰皿をそいつらに投げたんだよな」

「そうそう、そこで一言。

”ねえ、あんたら何やってんの！？”って！！

格好よかったなー！あたし王子様に見えたもん、あはは」

そうやってマイは、声真似をした。

客の3人は、俺と後輩の睨みを見てビビったのか、

それからは大人しくしていた。

「その後、マイが俺らの席にお礼に来てくれたんだよな。

確か、焼酎のボトルを持って”これ御礼です”って」

「そう...でも、ボトルをあげたのは、別の意味もあったんだよ。」

「え、そうなの？」

「キープしてくれたら、また店に来てくれるかなって思って。

...あの時に、もうユウ君に惚れちゃってたんだよねあたし。あははっ」

その後、マイの策略(?)にはまった俺は、何度か店に足を運び、

マイと色々話すようになり、親密になって行った。

「あたしね、あの時思ったんだ。この人は絶対大物になる人だ、って。

女の勘ってやつ？あはは」

「...そして、いつかこの人に助けが必要な時は、
今度は私が助けようって、そう思ったんだ...」

「マイ...」

「ユウ君。あたし今まで会った人の中で、
ユウ君ほど頼りになる人は居なかったよ。
今もそう、ホストやってるユウ君、輝いて見えるもん」

「でも俺は、指名ゼロの最下位だぜ？」

「今日からは、指名ゼロじゃないでしょ？
いやー、あたしがこれからのユウ君の成功への道の第一歩となるなんて、光栄だな。あはは」

...ユウ君ほど頼りになる人は居なかった、か。

案外、人の頼りになる事に難しい事は必要ないのかもしれない。

俺は、無理に頼りになろうとしていたから、失敗しただけなのか。

俺は俺の信念のまま、流れに乗って真剣に客に向き合う事。

それが、結果として頼りになる...器の大きいホストになって行くのかも知れない。

「...マイ、有難う」

この日、マイが店に来てくれたことで、俺がどれだけ救われた事だろう。

この日を境に、俺は少しずつだが指名を取れるようになる。

そして、長かったホストの下積みの期間は終わり、次のステージに進む事となる。

《北条雄一伝〈h(エイチ)〉 ホスト下積み編 完》

北条雄一伝 <h(エイチ)>ホスト下積み編

<http://p.booklog.jp/book/57813>

著者：北条雄一

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/hojoyuichi/profile>

アメブロで続きを執筆中です

<http://ameblo.jp/hojoyuichi/>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/57813>

第一版：2012/10